特13
408

名作三十六佳撰内 繪本太功記序

文辞の妙行文之奇を賞するゝ、只よ艶麗なるのみならず、能く人情を穿ち感よ入らしむるを以て、尤も優れりとなす、正史紀傳世よ出る者無數、傑作偉筆なきよしも有ずと雖も、正史紀傳の事物の外貌のみ、能く情性を覺發し、精粗妍媸を辨する者の稗史よ如くものなし、就中雅俗を通曉して、愛觀を得る光を相しく、人情を穿ちたるゝ、院本を以て太斗となす、往時近松翁、筆を此道よ探りし以來、名聲を後世よ傳へ、竹田出雲、吉田冶氏次で聲價を博す、其事荒唐脚色演戯よ出るど雖も、空中よ此の大樓閣を畫き得たるの健筆ゝ、作者諸氏が多年拮据の効を著すよ足れり、實よ人情の表裏を窺ひ、風俗の微妙を知らんと欲せゞ、此書を拾て而して將た何

くゝ問はんや、頃日内藤氏、之が名作三十六番を撰び、順次之を刷出せんとす先づ第一着として、繪本太功記の卷成る、來りて序を求む、余大いゝ其時好ゝ適するを賛し、聊か賛言を記して、以て卷端を埋むと爾云

梅花笑を含んで南窓ゝ垂るゝ頃

開花園主人ぬるゝ

名作三十六佳撰内繪本太功記

○發端

作者 近松やなぎ 千近松湖水 葉軒軒

天ゝかなひしゆへやらん八百の諸侯從ひて紂王を討んといひしを我未だ天命をしらすとて諸の軍を引き具し先かへりぬ、實戰國ゝ大勇を しめす亂舞の音たかき、内大臣春長公の一と捕へ遠近の諸士大半屬し、登城い櫛の齒を引くごとくさも嚴重ゝ見へゝけり、取次の侍罷出、仰付られし安部の法印只今參着仕るとゆ上ぐれば近習の面ゝ斯と取次ぐ 間もなく内大臣平の春長、從ふ武士い羽翼の臣具柴筑前守久吉武智光秀諸共ゝ樣際近く座ゝ直る、久吉下部ゝ打向ひ、君ゝもてとのふゝ待かね、早く案内ゆせよと、いふ間程なく法印安部氏遠都の水清く、よどまぬ公家の交りゝ衣紋正しく入來る、春長莞爾と打笑給ひ、法印にい大儀〳〵、其方を召し寄せしい餘の儀ゝあらず、あれ成大庭の蘇鉄泉州妙

國寺より有しを、此安土に植置く所より、頓りより聲を發し妙國寺へ歸らん、歸せ〳〵と震動する事三夜より及ぶ、正しく變化の所爲ならん判斷いかよと有げれば、始終を聞入る内よりも理を考ゆる道〻の、胸の筭木より眉をしかめ、ほは尤成るほ尋某考ヤせしより、草木心なしといヤせ共、佛地より育朝夕妙經を聞込み、一度枯し木なれとも、元の如くさかへしも法花經の德ならずや、法力の尊きほは宗旨の有がたき所なれば君よりもほ滿足ならん、急ぎ佛地へ送りかへしたまへるが肝要ならんと法印が水を流せる辨舌ほ實晴明の末孫の器量顯れ見へよける、血氣の大將道理よせまり、春長が手より入れし蘇鉄返すべきいれなし、暫らく妙國寺へ預ける旨、使者を以てヤ遣し身が心より叶ほざろ法花の族いれざる宗論を好み、上を恐れざる無禮の段〻、牢獄へ押込置たり、其上今日捕へ置たる背天一人身が目通りへ引出せよ、安部氏よほ休足有て然るべからん、久

吉よほ麁略なき樣もてなすべし、はつと領掌式禮目禮、具柴より隨ひ法印は次の一間へ立て行、程もあらせず下部共、普天坊を高手小手庭上に引すゆれば、光秀ほ普天より向ひ、貴僧、かゝる警しめよあふ事も、法義故と、は云いながら、獄の苦しみ察しやる君よりも是より座ましませばしさつて出牢の御願ひヤ致されてよからんと、普天をかばふ明智が詞、尾田殿くわつと怒の面某が詞も出さぬ内、出牢の願ひせよとは、いらざる汝がひいきの沙汰扣へて居よと居丈高、ねぐさり坊主よつく聞け、此度妙國寺の庭木の蘇鉄、某所望し此安土より植置きたる所、むせうより妙國寺へ歸らんとはゆる、餘りかしましきよつて、暫らく彼地より預ける間、佛木たり共春長所望の上は、再び返すよあらず、汝らを番人よヤ付る間、其旨急度心得られよと、冥途の高祖へヤ達せよ不承知ならば直樣より、普天を以て冥途ゟ返答有べし、儕も法花の妙をしらば二度此土へ立歸り、某

よ詞をかはせよ、最早左樣なる法力は有まい〳〵、一時も早く使を急がせよ、早く〳〵と不敵の春長、重惡つのる權威の仰こらへ〳〵し普天坊、ずつと寄て齒がみをなし、ぬかしたり喇つたり、汝が宗門で有ながら、高祖をかろじ奉り、惡口雜言報ひ忽遠かるまじ、愚僧只今命を滅するも、汝が使よ行よあらず焰魔の廳へ趣僧が惡逆訴人の爲よ此世を去る、見よ〳〵頓て火の車を持せ、拙者迎ひよ來るべし、一時も早く冥途の門出急ぎたし、光秀殿介錯と、晉る普天を光秀がはつたとよらみ、我君よ詞をかへし、惡言を吐手間で、なぜ助命の願ひい致さぬ、恐ながら我君よも御怒りをしづめられ、御助命の程偏よ願ひ奉る、元來勇猛盛んにして、良もすれば靈場佛地を破却したまふ事、君の一失山門の衆徒等も、急難を遁れんと一七日の加持祈禱、惡逆の勇將と、世の人口默止がたし、只仁惠の御計らひ偏へよ願ひ奉つると、事を分けたる光秀が、詞よ春長突立上りだまれ光秀、我惡逆とい憎き過言赦されづ、と拳振上明智が頭りう〳〵、打すへたまへと手向ひの、ならぬも主命はつと誤まり入たる無念の涙普天猶も怒りの顏色、惡鬼魔王と云い汝が事、君有て臣臣有つて君たる事を知らず、情なくも大國の、主たる光秀殿を、童おとりようち打擲天罰佛罰一時よ報ひ墮獄よくだしくれんずと、怒り重ぬる額の天弓、光々として日運の、出現有りと、身もよだつ、ナヲく物ないいせそ早くも國境へ引立よと、ば下知恐れ家來共、はつと斗よ引繩の、頓て恨をしらさんと、題目の聲一心よ、佛敵春長赦さじと詞い正よ本能寺、御法の庭の露となす、佛の報ひ宗門の威力の、程こそ

○六月朔日の段

扨も其後天正十年六月上旬の事かとよ、內大臣平の春長、東北よ猛威をふるひ押て都よ上洛有る、ば嫡男城之助春忠二條の御所よ居をしめ給

ひ、天奏御沓を入給へゞ饗應の役人ゝ武智日向守光秀、森の蘭丸初めとし、諸代の良臣古老の諸士列を、正して相詰る、院のゝ所の内勅涙花中納言兼冬仰出さるゝゝ往昔應仁の亂れより、諸國の逆賊王威を輕んじ、都の内へ軍馬を引入玉座近く馬蹄よ穢し叡慮穏ならざりしよ、幸春長大志をいだき帝都を無事よ治むる條、主上叡感淺からず、其功を賞し給ひ、嫡子坡之助春忠を從三位よ叙し左中將よ任せらる院の内勅、斯の通りと有けれゞ、春長はつと平伏有こゝ有がたき勅命、不肖の某、なんぞ一臂の力よ及ゞん、三好を初め逆徒原、四方よ退散いたせしも君の聖德數ならぬ身春忠身よ餘つたる官位昇進、天恩謝するよ詞なしと、勅答有れゞ兼冬卿、やゝ滿足のゝ氣色、春長重ねて軍務よ暇なき某、心斗のゝ饗應、鄙びたる觀世能ゝ上覽も時の興、奥殿へと有けれゞ袖かき合せ兼冬卿、武智が案内よしづゝ、と奥の間さして入給ふ、春長跡を見送つて、蘭丸是へと近く召れ、汝も兼て知る通り、無二の忠士と思ひの外、心得がたき光秀が心中、彼が心を探らん爲、いつぞや寺よおゐて諸侯の見る前、恥辱をあたへ恥しむれど面に怒りを顯ゝさず、無念を忍ぶ彼が胸中、猶以て不審の一つ、其儘よさし置ゞ、虎の子を飼よ同じ、逆心の企有や虛實を探りためし見よと、仰よ蘭丸さんゝ、武智が行跡聊不審よ存る折から、割符を合す君の御心、思ひ合する彼が俗性頭上よ喜怒骨有者ゝ主人よたゝるとゝ異人の禁め、もし逆心よ極まらゞ、討て捨んよ手間隙入らず、奥へ踏込引とらへ、鹿忽也蘭丸、實否も糺さずあら立なゞ、返つてひが事出來せん、事よよそへて、ナ合點か、ハテ、畏り奉る、必油斷いたすなと、示し合して春長公帳臺、深く入給ふ、蘭丸ゝ只一人、兩手をくんで思案顔、工夫をこらす折も折奥は、亂舞の打囃子、二番三番ワキ能も、終りと見へて配膳の、時刻も移る、巳の上刻、武智が一子重次郎、古實を、守る饗應司、配膳のかけ盤山海

の珍味美をつくし、目八分ゑ捧げ來る、菌丸見るより重次郎先待れよ、饗應の役目は、お手前の親父、光秀殿と此菌丸、兩人立合ヤ合せも有べきを、自分一人の取計らひ、此菌丸は呑込ぬ、膳部の次第い、いかゞでござる、料理は板元奉行中井半左衛門七五三の献立七五三、何ゑも せよ、相役の某ゑ一應のこたへもなく、氣儘成いたし方、近頃以て不埒千万、此分では差置れず、光秀殿へ直應對、役所へとかけ行向ふ、禊ぐいらりと出來る武智、菌丸傍へぐつと詰寄、樣子殘らず、聞れしな武士は禮義を表とするゑ、此菌丸を踏付し仕方、いか成趣意か言へ聞ん、返答次第手い見せぬときつゞ廻せゞゝ仰々しや菌丸、道若氣の一徹、何故貴殿を侮りヤさん、最早ゆ膳の時刻故、役目大事と勤る光秀、だまり召れ、饗應の役、貴殿抽者ゑ相勤ゑとい主人の云付、主命をもどき、自分の氣儘ゑせらるゝはゞ、聞へた、こりや何か、抽者を役ゑ立ずと思し召か、但し又智恵者

と呼れし武智殿、人を見下す高慢か、人も知たる其元の素性、何か涙人のよるべなく、所〻方〻をうろたへ廻り、北國ゑかゐて詮方なく、粮ゑ盡たる身のせつなさ、土民どもの小悴を集め、手跡指南の禮物で、命をつなぐ寺子やのお師匠樣、まだ有。日外、江州佐々木征伐の折から、此下と先手を爭ひ、箕作和田山時限の合戰、久吉ゑ仕負ても、耻を耻共思いぬ其元、何と、そふでいでざらぬかと心ゑ思いぬ傍若無人、さしもの光秀くいとせせき上、物ゑ狂ふか、菌丸、太切の場所と事を慎み、云せて置けい法外千万、今一言云つて見よ、舌の根を切下ん、ならゞゞ手柄ゑ切て見よ、切て見せふ〳〵と兩方が互ゑ詰寄詰より、既ゑ斯よと見へたる所、禊あらいゑ春長飛かゝつて光秀が、衿がみつかんでどうと捻付、やをれ光秀凡武家の格式い、古實を以て式法を用る、過たるい猶及ゞざるゑしかじとい、古人の詞、院の内使も重けれど、皆それ〳〵の例法あり中納言殿饗應

の膳部、金銀の瓶器を用ひ、七寶を芥のごとくちりばめ、法外奔走此後、主上仙洞の行幸よゝ、何を以てか饗應よ叶ゝんや、其上薗丸がヤゝ我詞も同然なるよ、異變致す慮外者、頻ぶて薗丸、ハテ早くぶて、〳〵ハ上意なりと閑丸が腰の鉄扇振上て、眉間眞向續打、くい入要よ血ゝ滝津瀬、是ゝとかけ寄重次郎膝よかためて引敷光秀、流るゝ血汐諸共よ眼血走る、無念の顔色春長、つく〳〵打守り、いかよ光秀、今閑丸が手を以て春長が折檻、口惜ふゝ思ゝぬかと、底意を探る大將の、詞よ光秀居直つて、仰共覺へヤ數ならね共武智光秀、君よ捧げし我命、骨ゝひしがれ身ゝヤだ〳〵よ成迚も、大恩有ハ主人をお恨ヤさん樣ゝなし、左ゝ去ながら世の人口、春長こそ鬼の再來、情をしらぬ大將と、譏りを殘したまゝん事、末代迄の家の瑕瑾醜惡を憎むハ生質、諸士の恨ゝ小車のついよハ身よ報ふといふハ心の付ざるは、淺ましや悲しやなァハ心をひるがへされ遠仁義の大將

と、呼れ給はれ我君と、或は怒り、或ゝ歎き、五臟をしぼる、血の涙、思ひゝ千ゝよ重次郎父の心を察しやり、齒をくいしばる忍び泣心ぞ思ひやられたり、金言耳よ逆立つ大將、猶も怒りの聲あらゝか、いはれぬ諫言、推參至極、目通り叶ゝぬ立てうせう、〳〵く薗丸武智光秀親子の者、門外へ引出させ、早く〳〵と烈しき下知、はつと傾掌、閑丸が猶豫ゝいかよときめ付られ、無念重なる光秀が、我子を引立出て行、底意は誰かしら涙の萬里よ羽打つ大鵬や面目涙重次郎身はしよげ鳥の片羽がい、父の心はしらよぎて、神も佛もなき世かと、身をかこちたる忍び音の、胸いくら閑五月やみ詮方、涙諸共よ御門の外へと出て行、名よしおふ、花の都を隣して、時よ近江の本城を跡よ見なして今爰よ、假の舍りの上屋敷千本通りよ一搆へ、日向守光秀が、出仕の留主ゝ探の方、夫子の武運長久を、神よ祈をかけまくも、手づから備ふる神酒供物、殊勝よ見へて爪はづれ、遠は武家の奥

床し、折から次の襖を開き、出來る武士ハ武士武智が組下九野豐後守、年も五十の分別盛り、操が前ヨ兩手を突き、先以て今日は、林鐘の初日、大内ヨても永室の節會、殊更太守光秀公、大公義ヵ饗應司の大役仰付られ、御家の眉目我〻迄大慶、至極と述ければ、操の方取敢あへず、夫光秀重次郎諸共未明ヵの御登城、殊ヨ大事ハけふのお役目、常〻短氣の春長樣、生れ付いた夫の一徹、何の障りもない樣と案じるハ女の常、悲しい時の神佛と手づからのお備へ物、是ハ〳〵、イヤもふ万事抜目なき光秀公、追つ付け吉左右上首尾と、挨拶取〻なる所へ、殿樣の御下城と、しらせの聲ヨ妻操、我子の乙壽諸共ヨ豐後守も座を改め、待間程なく武智日向守光秀、常ヨかはりし其面色、疊ざはりも荒〻しく、不興の体ヨ立歸れば、跡ヨ隨ひ重次郎、しほ〳〵として座ヨ直る、夫の顏色額の疵、心ならずと操の方、光秀の傍近くヤ我夫、いつヨないお顏持、お氣もじ悪ふはござりませぬかお怪我でもなされたか、どうやら氣が〻り胸騒ぎ、心が〻りと尋ぬれど、とかふいらへもせぬ夫、重次郎顏ふり上、今日二條の館ヨて饗應司を勤むる所、日頃不和なる森の蘭丸、我〻へ樣〻の悪口雜言それのみならず春長樣、以ての外の御怒りヨて、蘭丸ヨ仰付られ、テレあの通り、父上の眉間へ疵の付程ヨ、殿中でのうち打擲、目通りへは叶はぬと、警固の武士ヨ追立られ、無念ながらもおめ〳〵と、顏押し拭ひ歸りしと、云〳〵こぼす口惜涙、聞ヵ妻ハはつと、胸をつらぬく釘、豐後も俱ヨ拳を握り咬牙齒ぎしみ無念の涙、樣子立聞四方天、ものをも云ず表の方、かけ出す裾をしつかと留事をせいたる汝が顏色、子細ぞあらんといはせも立ず愚なり豐後守主人へ耻辱をあたへし素丁稚の蘭丸め素頭引抜立歸る、妨げするなとふりはどき行んとするを猶も引き留、其憤りは鹿忽〳〵、汝が不骨は主人の誤り、返つてお家の仇とならん、先つ待たれよとさ〻ゆる

丸野、シャ面倒なと勇氣の田島、放せ放さぬ二人が爭ひ、光秀聲かけて待て
兩人、身が詞も出さぬ内立騷いで見ぐるしいしづまれやつとせいすれ
ば、物よこらへぬ田島の頭、武智が前よくつと諂かけ、縱誤り有るよもせ
よ、丹州近江兩國の太守、殿中ての打擲ゝ、我〻も俱よ恥辱、煩恥をさらさ
んより、薄丸めを打て捨、叶はぬ時ゝ生害と覺悟極めし四方天、なせお
留なさるゝな、ヤア愚〳〵 光秀を打たるゝ私ならぬ主命、蘭丸よ遺恨ゝ
ない、元來短慮の御大將、心よ叶へゝ飽迄寵愛、又叶はぬゝうち打擲、縱命
を召さるゝ共、君よ捧げし我一命、ちつ共、惜まずいとゝぬ某、我存念もし
らずして息筋はつて尾籠のふる舞、しづまれすされとねめ付る、道理よ
逆荒者が、行も行かれず立たり居たり勇氣も、たゆみ猶豫ふ内、御上使の
御入と下部が聲、光秀不審の眉を皺め、心得ず思ひがけなき上使とゝ、
何よもせよ、女房躰は次へ立、早く〳〵と追立やり、威儀繕ふて出迎ふ、案

内よつれてのつさ〳〵、役目を功よ肩附はり、頬も眞赤赤山與三兵衛上
座よ、むんずと押直り、上意の趣餘の義よ有ず、先達て眞柴久吉、郡三家を
退治の爲中國へ馳向ふ、急ぎ光秀加勢として、西國へ下り久吉の幕下よ
屬し、戰功を勵むべし、其功勞よよつて、出雲石見の兩國給ゝるべき間、今
迄下し給はる丹州近江二ヶ國ゝ召上らるゝ旨、城代へヤ渡し急ぎ城を
明渡すべしとの嚴命也といふよ人〻二度惚り、主從顏を見合せて暫し、
詞も口籠る物よ動せぬ光秀は禮義正しく上使よ向ひ、ハア、台命の趣委細
承知仕る、直樣是よ西國下向、城明け渡しの用意万端、家中の諸士へもヤ
渡さん、ホヽ、早速の領掌神妙〳〵、一刻の延引ゝ一刻の不忠となる、出陣や
ら宿がへやらがらくた道具片付て、早〳〵 城を渡し召れ、役目ゝ是迄お
さらばと、よくてい目禮取ませて、眞綿よ針の青疊、蹴立てこそは立歸る、
一徹短氣の田嶋の頭、コレサ御主人、今亦山が上意の次第、前後揃はぬ詞の端

〳〵、西國加勢と披露して、實は御身を改易し、自滅をさせんず春長が姦計、良禽は木を見て栖、不仁非道の尾田春長、義理も忠義も是限り、西伯姫昌は殷を討ち、ついに天下を治めし例、破鏡再び照さぬ道理、今目前に顯はれたり、今隨臣の空虛をかんがへ、一時に尾田を討亡し、天下に覇たる功を上、名を千歳にとゝめんに、さゝいかに〳〵とせき立田嶋、やゝ默然たる日向守、始終こなたに立聞操、襖あらはに走り出、夫の傍へさし寄て、忠義一途の田島の頭、さら〳〵無理とは思はねど、勿躰ない我君を殺して四海を奪ふとは聞もうるさい穢らはしい、罪は目前美濃尾張主を殺して一日も、安穩ならぬ天の責お年寄れし母御樣、いとし可愛子供迄俱に惡名とらするが、それが本意か情ない妻子不便と思すなら、御身全ふ月と日の、くもらぬ鏡武士の、操を立て給はれと、わつ〳〵といつ理をせめて夫を思ふ貞心の思ひは千筋百筋の苧綛を亂す愛涙、とゝめかねて

ぞ見へにける、元來仁義の豐後守、光秀に打向ひ、文武二道の我君に忠諫めゆゑ憚りなれ共、和漢の書籍に記せし通り反逆謀反の輩が本意を達せし例ゐなし、世に秀たる光秀公高木風の俗語にひとしく、皆佞人のなす所、時節を待て誤りなき様開きの手段にさま〳〵、上使に立し赤山と君が五音を考ふるに水火既濟の卦に當つて、西施國を傾くる不吉の占、一旦勝利有といへ共日ならずして災生じ終に全からざる前表只幾重にも思ひとゝまり下されよと、事を分けたる諫の詞いへ共とかくの返答なく、心なき人ゐ何ともいゐゐいへ、身をもおしまじ名をもおしまず、さりやいよ〳〵は謀叛の思し立でござるよなと、いはせもあへず豐後が首討てかたむる、謀反の首途、適〻、此上は軍の手配、さいで出陣の用意をせよ、所存の程こそ

○同二日の段

何と三助暑くてこたへられぬじやないかい、此下郎よゝ何が成る、朝とくから手桶の切り水、くれ方も又此様よ汗水よ成てのはき掃除、ふらも後の世よゝ大將よ生れてくべいと思ふが、どふでもあらふなあ、されば此本能寺を假殿よしてござる春長様ゝ、前生ゝ鬼だと云べ、奴が大將よならぬ事も有まいゝさと、いへゝ傍から珍内が、扨二人ながら何をいふぞい、死での先ゝ片便、奴から大將よ生ながらなられた眞柴殿、それを知りつゝ、ほんよやれ〳〵、來芝の事ゝ、山男よして、山村程今をため、里虹者じやといゝるゝ市紅が肝心だと、どつと笑ひの折こそあれ、〳〵あれよ見ゆるは先供、なむ三春忠様のは入だと猫よ鼠と奴共、おのが部屋へと逃て入、程なく近付く銀乘物、數多の武士が前後をかこい、築地は門よ昇すゆれば、かくとしらせよ森の蘭丸、禮義正しく出向ひ、阿野のは局は苦勞よ存じ奉ると、詞の内よ乘物の戸を開かせて阿野の局、三法師君

を抱まいらせ、しづ〳〵と立出、春忠様のは名代と此君のは入故、祖父君春長公よは迎ひとして、自がもりまして參りしよ、殊のふはきげんもよろしく、お嬉しう存じまするとのたまひければ、それゝ一段さぞ祖父君よも、お待かね、いざさせ給へと蘭丸が、案内よつれて付〳〵も門内さして入よけり鹿の音むしの音もかれ〳〵の契り、あらよしなや、形見の扇より〳〵、猶うら表有物ゝ、人心なりけるぞや、おふぎとゝ空言やあゝでぞこひゝそふ物を〳〵、局が一曲出來た〳〵、悴春忠が名代孫殿へは馳走よ、何と面白いか、さつげ〳〵と大盃、はつと心得しのぶがお酌蘭丸へさす所なれ共、阿野の局が舞の一手、勞を謝する共爲よ局へ盃さしやす是ゝ〳〵ふつゝかなる一と奏は意よ叶ふて此上もなき身の冥加といひつゝ、局ゝは盃、少し引受差盃べ、春長公笑壺よ入、蘭丸局が問を仕れと重きは諚も諂なく、仰よゝへ共一滴も及べぬ某、此義ゝ偏よは高免

を、扨呑ぬ所を呑すが興、者い汝が望次第、すりや御者を下されふとな、ま、六十餘州を手よ握る此春長、ま、何なり共望め〳〵、ア然らば何とぞ此閑丸よ、軍勢を四五千斗下し給はらば有がたからんと相述れば、こゝ心得ぬ汝が望もし軍勢をあたへなば、さんい丹州亀山へ押寄、只一戰よ光秀が首討取て、君の災をさけヤさん、成程尤なる願ひなれ共、いらざる心配無用〳〵、左樣な事よ骨折ずと、早く一盞を傾けて、暑を凌ぐが身の養生、飛立斗り有明の、よる晝となき樂しみの、桜花よも榮耀よも、此春長よは及ばぬ〳〵、我君のは諚よいひへ共、安土の無念を散せんと一度は謀叛の旗を上、窮鼠返つては身の大事、アヽ迫は若氣、北國よい柴田勝家西國よい具柴久吉、龍に翼の尾田春長、君のは諚は去事ながら閑丸殿の詞の如く油斷大敵、ハテサテ局迄が同し樣よ。いらざる此場の長詮議は客人が嘸ふら〳〵眠り、身もはつと退屈イテ一睡の夢の間の契りいざと戯れて、座を立給へば阿の〻局若君誘ひしつ〳〵と帳臺、深く入給ふ、跡ようつとり閑丸が、心一つよとつ置つ、思ひは同じ女氣の人目しのぶが寄り添てヤ閑丸樣、もふ何時でござりませふなアこれはしのぶ殿そもじいまだ奥へ行ずか、アイハテ扨それい不埒千万、は用もあらん早奥へと、いふ顔じつと、打詠ぼんよまあ女の心と男とはそれ程迄違ふものか、兄齊藤藏之助殿よお願ヤて、春長樣の奥勤も、あなたのお傍よ居たいばつかり、今更いふも恥かしながら、去年の初春浴東の、地主の、お庭の花盛り妹共よ誘はれ願ひかけまく初戀の、色も香も有殿はぶり、觀音樣のお仲立、互の胸の下帶も、とけて嬉しい新枕かわるまいぞのお詞が直ぐよ心の誓紙ぞと、片時忘れぬ女房が、お傍よ居るがおいやならいつそ手よかけ給はれと、ひんとすぬ木の糸櫻、花も亂るゝ風情也、さしもに猛き閑丸も心の外の曲者よ、取ひしがれて背撫さすり、もふ何事なふヤせしがお氣よさいらば

其平〳〵、百万の強敵よもぴくともせぬ某が、斯の通りと手をつけば、又人をじゆつながらすのかいな、春長様も大方よ、班女が閨のお睦言、お局様の取相で出船の相伴、ござんせと手を取れば、扨たしなみや、人目を忍ぶ二人が中、殊よ今宵い君の直宿、又の首尾をとふり切を無理よ引立奥の間へ、入やいるさの月かげよ、しのぶの亂れ、亂れあふわりなき夢や結ぶらん、早更渡る、夏の夜の、そよ吹く風も物すごく、寒られぬ儘よ此大將、手づから障子押ひらき、何心なく茂みの方見やりおまへばさは〳〵と驚きさはぐ塒の鳥、いぶかしや、まだ明やらぬ夏の夜よ、庭木をはなれ、騒ぐむら鳥、合點行じときつと目を付、あやしみたまふ時しもわれ、遠音よひゞく鐘太鼓、春長つゝ立耳そば立、〳〵く次第よ近付人馬の物音、直宿の者いあらざるか、急ぎ物見を仕れと、仰の下よ阿野の局長刀かい込走り出君の大事よいぞや、蘭丸殿は何所よ有早く物見を致されよ、

わらはも倶よと表の方、呼はり〳〵かけり行間よ蘭丸一間よ、飛で出れ、氷聲かけ〳〵蘭丸、反逆有と覺へたり、急ぎ物見を仕れと、上意よはつと蘭丸は振返り、見る廊下の高欄是幸の物見ぞといふより早くかけ上り、四方を急度打見やり、物のあいろいわからねど、此本能寺を心ざし押寄るい、察する所武智光秀、光秀が反逆となる今こそ後悔汝が、謀開入ざるも傾く運命、只此上は防ぎの用意、委細承知仕る、が縦一致よ防ぐとも院内わづか三百餘人、思へば〳〵主君と倶よ、蘭丸我君様口惜や主從が怒りの齒がみ逆立髪、無念涙の折からよ、表の方よ森の力丸、廣庭よ大息つぎ、油斷有な兄者人、武智光秀我君よ、多年の恨を散せんと、手勢すぐつて四千餘騎、左馬五郎を始とし、或い齋藤藏之助築地間近く押寄せていと、いふ間もわらず蘭丸は、其儘ひらりと、飛おりて、我君よい恐れながら防ぎ矢のは用意有て然るべし、某がかしてよ向以、一當わ

て〻眠りを覺さん、力丸來れと兄弟は飛がごとくよかけり行跡打見やり春長公、此上は防ぎの一矢、先差當つて一大事は三法師、宗祇若をいざない早く〳〵、ほ誕の下よかひ〻〻しく、しのぶ諸共茶道の宗祇若君いだき參らせて足もわな〳〵胴ぶるひ、しのぶも俱、ようろ付所へ、多勢を切拔阿野の局、其身は數ケ所の痛手ながら、血よ染長刀かい込で心も強よ立戻り、ア〳〵我君樣、最早敵い込入ていへべ、君よ替つて一と軍ほ身を遁れ下さるべしと、口よはいへとほ名殘、涙彌增斗也、愚〻なまなか身を遁れんと返つて名もなきやつ原よ、首を渡さべ、死後の恥辱、汝は我よ成かはり宗祇引連れ三法師を何とぞ守護し落延ひて、此旅諸共久吉が手よ渡し、我存念を晴させよ、猶豫は返つて不忠の至りと、仰よわつと泣くづおれ、假令不忠よ成とても、君の御最期よそよなし、何と此儘落られふ、此義い御赦し下さりませ、是を思へは自らが、宵の酒宴の共時

よ班女が閨のかこち言、其一さしのわふぎとい、別れを告るしらせかと、思ひ廻せいいとゝ猶、悲しいわいのとどふと伏歎沈めべお道理と、心をくんで諸袖をしぼるしのふが俱涙、泣音をそゆる斗也、數多の切首片手よ引さげ庭先へ、立歸つたる森の蘭丸、それと見るより春長公、今よ始ぬ汝が働〻〻樣子いかよ〳〵、されべい、二條のほ所へい武智光安立向ひ當手の寄せ手い左馬五郎光俊采配取てきびしき下知、なれ共味方い必死の勇者、ほ覽のごとく首討取、一泡吹せいへ共、始終の勝利い、成程〳〵、只此上い潔く、死出三途も主從俱よ、今聞通り我覺悟、早く此場を落延ぬか、但し三世の緣切ふや、共義いなア緣切が悲しくべ、一時も早く落延よお局君の先途を見届くるい此蘭丸、片時も急ぎ裏門ム、宗祇坊い何をうつかり合點もふ最前から落たふて〳〵氣い上つり、しのぶ殿もほ供の用意といへど遠よ忍び夫、言たい事も面伏せしほれ、

泣く〳〵立上れば、蘭丸聲かけ、しのぶい君のは供叶いぬと聞て恟り驚く
しのぶ、そりや何故、汝よ、お谷なけれ共、そちが兄齋藤藏之助光秀よ
一味の反逆、敵の末い根を斷て薬を枯す、命を助け共儘歸すい是迄、是
迄君への宮仕と明て云はねと妹と脅の、中を隔の垣となる、しのぶが憂
身詮方も、涙ながらよ用意の懷劍、咽よがいと突立れば、〳〵何故と驚く人
〻大將春長感じ給ひ、女ながらも適の生害、兄とひとつでない潔白、今
日只今、春長が仲人し蘭丸が宿の妻、心殘さず成佛せよと、仰よ手負蘭丸
も、はつと斗よ有がた涙顔よ紅薬のからくれない血汐よ染る兩の手を
合すも二世の名殘ぞと物いひなげよ夫の方は大將をふし拜み、笑顔を
婆婆の置き土産、わへなく息いたへよけり、歎をよそよは大將、勇を付ん
とヤア〳〵蘭丸、我い是よて討手を引受、此場を去らず討死せん、汝い是よ馳
向ひ、敵のやつ原一泡吹せ、名を万天よ輝かせよと勇め給へば、〳〵、仰よ

や及ぶべき、たとへ光秀、何万騎よて寄する共、片はしなで切まくり立君
のは供仕らん早おさらばと立上れば、涙を拭ひ宗祇坊局をいさめすゝ
むれば、是非も涙よ袖の涙、たゝよひ、ながら若君を、宗祇が背よしつかり
と、是ぞわふぎの愛別れ見かへる、名殘見送る名殘、又立戻るを蘭丸が、中
を隔つる鯨波、早亂れ入る諸軍勢切立なき立女武者、其名も、高くかな書
の、筆よと、いめて末の世の美談と、こそい「成よける、寺中は合戰真最中、力
丸蘭丸一同よ一進一退離散して、或は討れ或い討、つゞくあらても有ら
ばこそ堅甲利兵の大軍を防ぎ戰ひ流るゝ汗と湧出る血汐、から紅いよ
水くゝる龍田の川よ楓薬の落て流るゝ如き、なり寄せ手の從將安田作
兵衛、春長を討取らんと、塀際よさし寄れど、味方の勢よ隔られたやすく
内へ寄付かれず、得たりと鎗を力杖、ゑいと一はね高塀よ、飛上りたる早
業さそく目ざましかりける、次第なり、さしも名高き靈場も修羅の巷と

鳴る鉦の、天地よひゞく陣太鼓亂調よ打立〳〵、先よすゝみし田島の頭手勢引具し一同よおめき叫んで攻かくれば、春長公一越調反逆光秀はいづくよ有る主よ背く天罰思ひしらせてくれんずと、弓杖ついて罵る大音、さしも勇有明智勢、恐れて思はず進かねたぢろく隙よさし詰引詰射給ふ矢先よ先手の軍兵、はた〳〵と射たをされ、あだ矢はさらよなかりける、此虚よ乘て、坊丸力丸、鉦をひねつて八方へ突立なぎ立阿修羅の如く廣庭、さして、退て行、客殿よは春長主從、膝をならべてどつかと座し、力丸無念の齒がみをなし、口惜や往昔天文年中よ、今天正十年迄、四海の内よ横行して、武威を以て天下の兵亂を切しづめ、民を塗炭の中よすくひ、四方の敵國君の英名を、鬼神の如く恐れふるひ、正二位右大臣よ昇進し、大業既よ成就せしよ逆臣惟任が爲よ空しくならせ給ふとは、天魔の所爲か口惜やと、血汐よそゝぐ、血の涙とゝめかねたる斗也、春長、一言の詞もなく、はらはかせを脇腹へ、がはと突立引廻す、俱よ冥途のお供と力丸坊丸殉死の切腹むざんといふも餘り有る身の果ぞ、あわれなり

○同三日の段

董卓は漢室を燒捨伯知い水を以て趙をひたす、例を爰よ具柴が軍師名よ高松の城廓も水死の合戰强勇も手よ汗、握る斗也、武家の家でも姦き、始共い寄こぞり、何とあげは、毎日〳〵ふる雨で水の增るが癪の種、是と云も尾田勢の皆仕業、中でも憎いい具柴とやら松葉とやら、突さがしてやりたいわいのふ、さこそ〳〵其突次手よかいたはしいい、妹ぢの玉露樣、浦邊山三郎樣よきつい惚横、大方坪の明く時分よ成て、山三郎樣の爺ぢ空之進樣、ア林丈左衛門めよお討れなされた故、此程はふら〳〵と戀病ひ、そふはかいのふ、こちらも覺の有事、どふぞ首尾して上ましたいと、迫やさしき女の情、打連一問へ入よける、思ひ内よ有い、其色眼中よすゝむと

かや、父の最期よ亂れ髪、無念の仇を角額、浦邊山三郎利氏ゝ、主の、留主を窺ふて林を一太刀恨んと、屋敷へ入込生死の境、斯と白齒の、玉露が、出合頭よ見合す顏、はつと驚き引返す、袂よすがりコレ待てたべ浦邊樣、お前ゝ深いお望が、有てのお越と、見たゝ逆はぬ形かたち、其お姿よ戀こがれ、送る千束の返事さへ、ないゝつれないお心ぞ、せめて一夜の添臥を、赦してたべと取付いて、じつと、しめたる手の内よ心、餘りて見へよけるコレ〳〵壁が高い、推量の上は包むよ及ばず、かくまい置かるゝ敵丈左衛門、何卒今日中よ手引して、勝負をとげさせ下さらば、こなたの心もむそくよせじ、ゞ、何とゝせいたる面色、玉露も胸をすへ、成程〳〵私しが爲よも身ぼの敵折を見合せゝ垣越よは案内ゲましよ、ゞ、其詞よ逆ひなくば、まだ云開す子細も有、こなたの部屋へ、そんならこふと手を取て、顏ゝ上氣よ散花の、玉露姫は時の雰濡よかしてへ入よける、折もてそ有れ立歸る、館の主

清水長左衛門宗治智勇を兼し其骨柄、跡よ從ふ、女房ゝまだ、十九二十二つ三つ、雪の白粉やり梅が紅花色そふ、緣子をいだきいたゝり立歸る、宗治ゝ眉をしゝめ、ゲイやり梅晩春の末より三家へ人質、悴諸共遣ゝせし所、いまだ合戰の勝利も決せず、敵よかこまれたる此城中へ歸されしゝ子細が有ふ、何と〳〵、パテ、尤のお尋、此度三家ぼ加勢よ向ひ給ふといへ共、手を空しくして日を送り、水の手一つ切事叶ゝず無念さゝ夫迚も同じ事、もし討死致されてゝ大事と成、手立を以て一時の合戰ゝ遠からじ、それ迄ゝ英氣を養ひ置るゝ樣、うさを晴すゝコレ此若、隨分〳〵やり梅も、心を付よとはげしきぼ諡、此子の顏も見せたさ、見たさとゑくぼよ愛持つやり梅が色ぞこもりて、見へよける、義よはり語し宗治ゝ、指折て日をかぞへけふゝ早六月三日皐月の末より敵方よ大變有凶星を見極め置つるよ、土俵を突上優長なる仕かた、間者を以て敵方の樣子、聞出さんと思へ

共、是ぞといふ謀なく、空しく入水する時ハ後〻諸人の物笑ひ降參する
ハ家名の恥辱是迄度々の合戰ゑ不覺をとらぬ宗治が、猿冠者如きの計
略、斯口惜き籠城も天ゑ我を貴給ふか、何とせんかとせんと名ゑ秀たる
武士も、傾く運と突息も天をゑらんで、ゐたりける、あハたゞしく庭先へ、
士卒一人かけ來り何か談ずる筋有と郡家ゑの使として、安德寺和尚只一
今本陣へ參着せり、殿ゑも早く此越と云捨家來ハ引かへす、汝が歸城
の上安德寺の使の樣子聞捨がたし、是ゑ諸士ゑ對面致し、事の子細をヤ
聞ん、其方ハ郡ゑ預り有丈左衛門四人同前なれバ万事心を付よ、行〻、
心得ましたと立上り奥と、表へ引別れ二の丸さして出て行、雨吹拂ふ松
風の、夏山とめし、虫の音をゑるべゑ、漂ふうらづたひ振も、小づまもかい
〻しく、夫を道びく健氣の玉露、花も木草も落花狼藉、互ゑ切合ふ種先
とはさき汗ゑひたする斗也、いらつて切り込太刀先を、しつかと請留丈

左衛門、小賢しい浦邊山三、僣が親の奎之進、評議の席ゑて某ゑ惡口吐
し入耳虫、討て捨たを恨ゑ思ひ、刃向ひ立ハ及バぬ事、ヤヲぬかしたり丈左
衛門、左いふ僣ハ、冠山の落城をよそゑ見て、當城へ逃込し人畜生、父の怨
の恨、思ひ知れよと刎かへす刀尖き双方が請つ流しつ烈しき爭ひ、見
る玉露は心も空、山三が念力通しけん林ハ刀打落され、逃んとするを切
ふせ〻、父の敵覺へよと、のつかゝつてとどめの刀、首引切つて大地ゑ
打付、ヘヘア嬉しや〻〻コレ玉露殿禮ハ未來でおさらバと、腹かき切らんとす
る所、戻りかゝりし長左衛門、やり梅諸共走り出、ヤレ死るとはうろたへ者
敵しもなき敵を討し言譯の切腹ならバ、某が計らひを川ひ、まさかの時
の討死こそ武士の道、城外の水をくゞり、久吉の陣所へ駈込、僞りならざ
る次第を頼み、かくまひもらふが術の第一、敵の空虛變の次第、相圖を以
て知されよ、折も有は具柴を討取、名を末代ゑ殘されよ、〻、一時も早く

〳〵とせき立清水、ふこに有がたし、武士の數よも入べき大功、命を的よ仕負せて立歸らんと驅出す、ヤレ山三樣お待なされ玉露樣とのわりなき中最前ちらりと、ナイヤ宗治樣、お妹ぢと、浦邊樣との二世の約束、すき合た二人が中、門出を祝する、扇も時の島臺士器、松い元來常盤木の、緒よい あらざる松竹梅、末廣びろと夫婦のかため、ハテ、重〻のお恵、玉露殿も隨分無事で、お前もお怪家のない樣よと、立派よいへどなま中よ、馴し枕のもつれ髪はなれ、がたなき兩人を、わざとせいする宗治夫婦、扇屏風やあふぎの別れ、心定めて城外へ飛が如くよかけり行、寢沙背水の謀を廻らし、見ぬ唐土の元帥も舌を卷べき寄代の軍術、水かさ増る大河の流せきとゞめたる土俵岩石、大水、運ぶ地車の、木やり音頭もらんぺ馬、揃いぬ肩も降參の、すき腹武士ゑられける、加藤い土手の高みよ上り、ハテ者共汝等いことゞく降參の者共成よ、此度の勤功、大將始某迄滿足せり、此合戰終

りなゞ、急度に扶持有べきぞよ、ヤレ兵粮を遣ひ終らゞ、暫時い休足致すへしと、下知を傳ふる其内よ向ふよ何か騒ぎし人聲、正清きつと打詠め、ハテ合點の行ぬ、高松の城外よあやしき取合、何よもせよ心得ずと暫もせず見渡す向ふよ、我組留んと數多の軍兵、小船よ打乘、右往左往よ追廻せゞ、山三郎い水中をくゝつつ、拔つ働けゞ、鵜よりも早き水練水魚、そこよ爰よと組子共、うろ付中よ、舶先を持、ゑいやうんと打返せゞ水いまん〳〵小船の組子涙のもくずと成りよける、此有樣よ殘りの兵船、進みかねて、ぞ、見へよけりてなたの岸よは正清が、何者成ぞ心得ずと、手ぐすね引て待所へ、血氣の浦邊い拔手を切、忠孝二つを額よ當て、飛鳥の如く遙の堤一聲諸共飛上れゞ、何者成ぞと取卷雜兵目もかけず、加藤が前よ兩手を突、某い郡家の家臣浦邊山三郎利氏とヤ者、高松の城内よおいて、親の敵を討取、立退んとせし所、城中お討手かゝり手詰の難義何とぞ武士のお

情よ、にかくまい下さらい生ゝ世ゝのに厚恩と、敬ひ入てぞ願ひける、加藤正清壁をあらゝげゃゃ紛らい敷願ひの筋誠親の敵を討は武門の譽と、郡家方恩賞も有へき筈返つて搦捕んとする高松勢、紛らい敷に邊の僞り、眞直よりやされよと、疑ふ詞よ、ゝに尤成るに仰、某が討取し親の敵とゆい、冠の城を拔出し、林丈左衛門とゆ者、我父杢之進と聊の論よより、父を欺し討よ討たる奴共無念止事を得ず何とぞ怨を報せんと主人へ敵討を願へ共、軍中とて取あへなく、剩へ敵丈左衛門い清水宗治殿よ預けと成ゝ心よ任せず、空しく月日を送る内、此度の合戰よ付、久吉公の計略よて、一城諸共兎の如く、水底のもくずとならんは必定、然い父の鬱憤を散せん時節なしと、透を窺ひ本望は、達したれ共、に救しなき敵討、いか成咎有んも知ず惜むべき命よいあらねば共、亡兩親の跡をもいとなみ、其上よて切腹致す我存念暫しが程のに惠、に聞屈下さらゝ、忘れ置じと手を摺

て、頼めゝ正清よつてと笑ひ、事明白成る汝が願ひ、尤其理なきよいわらね共、敵ゝたる此時節諸卒の疑念もいかゝなり、万事は主人の賢慮よ有ん、日も早西よ傾けゝ同道と、正清が深き心の計らひや、士卒來れと夕ばへの、下知の詞よ、ゝはつと、立上れ共内心い、久吉討ん血氣の若者毒蛇の口の、水筋を伴ひてこそ行過る、向ふ遙よ渉渡る主い誰共白浪を、振と衣の戀無常、急ぐ船路や行空も浮世、なりける、次第也

○同四日の段

東魚來つて四海を呑む、西鳥來つて東魚をくらひ、四海既よ穩ならざる戰場の地の理を窺ふ山づたひ、近習召連隆景は、しづゝ谷間よ立休らひ、ゝく旁此度の合戰誠よ武門のはれ軍、郡の枝城尾田が爲に悉く落城よ及びし上、軍慮よ賢き清水が城廓、久吉が謀よ乘せられ、入水と成たる高松の吠方を助ん共爲よ、はるゝ此土よ陣を取れ共、敵の要害強くし

て、味方を救ん術なく、三家の心もまち〳〵たるよ、三澤久代が非道の企隆景が見察遂はず白狀の上よ本へぼつ返し禁籠ヤ付し上は、敵方へ裏切なさん妨なけれべ、先此山の頂よ柵を結敵陣を見つもり、明日中よい攻かゝり、敵の勇氣を試んはザヲくいかよ〳〵、ここ、仰迄もいいず、我々共い先手を乞請雌雄の合戰、一命は風前の塵義は金鉄、千變万化とかけ破り、さしも名を得し久吉が、頭を取んな瞬く内に心安く思し召と賀いさましく見へよける、遙向ふよ人音は何者成かと見やる内、現世未來を一寺よ納め、大地の僧頭安德寺、清水が妹玉露姫、伴ひ歩む一水の影、それと見る、より手をつかへ、隆景公よは堅勝のてい恐悦至極、拙僧今日清水長左衛門樣へは陣見舞よ參りし所、妹は玉露樣を以て何か密談の使、味方の諸士よも心置く籠城、幸なる安德寺誘ひくれよとのは頼委しき子細は存せね共、是迄同道仕ると、ヤ上れべ玉露も面はゆげなる顏を

上、女のあられぬ事ながら、敵の陣所へ使の役、隆景樣のは賢慮を、伺ひました其上と、兄上の差圖故、安德寺樣諸共よは見舞旁參りしと、差出す文箱小梅川、手よ取り上て諾下し、一旦和議を相調い、事を計らん計略有れど、先達てヤ遣はせし所、此使よ惠瓊老、清水の妹玉露を差越んとは面白し、去ながら大地の住職、敵陣への使者とは憚り有と、他聞を恐れる密事の大役、足下ならでは叶ひがたし、先ヶ陣屋へ入せられ、暫時の休足あるべしと、詞の折もこなた成る、茂の枝よ飛違ふ數多の鳩が、あらそふ餌べみ、隆景屹度打詠め、あれ見よ、只今鳥類の餌べみの爭ひ、思ひ合すい昨夜の夢、我陣中へ飛くる村鳥、色めきたる草葉をくわへ、塵塚山をなしたると見へて夢散せしよ、目前人を恐れず餌よよる鳩の嘴先よて、實つしきたるアレあの蔓物、瓜い春長の紋所、三つ五つは五体を表し、其身を包む衣服こそ敵の城廓、鳩は源家の臣烏、我は清和の末孫たり、此蔓物の瓜

よりし、尾田春長を一戰よ討取べき神の告か、但しは既よ變有告か、ハテわやしやと明慮の大將、尾田を討たる光秀が、京都の大變神鳩のふしぎい後よぞしられたり、安德寺すゝみ出、智人の仰至極せり、唐土周の世よ當つて、赤色の烏武王の陣よ泊る、人〻怪しみ迷ふといへども大公望是を吉なりと、悅す、果して其詞よ違いず、周武の正よ天下と成、君よ其如く今陣前よ鳩の集りきたるといふは當家の吉瑞、愚僧もそぐはぬ戰場の、役目もやはり此姿、赤色ならざる此衣の頭ごかしよ取入て、強氣の尾田方取ひしぐも、國家のため爲天下の爲、王露樣よりは油斷有な、、、ぬ念よ及べぬお僧樣、わたしも名よあふ清水が妹、見聞聞なれ軍學軍術、夫よ迫り力を合せ、味方の怒り兄樣の、無念をはらすい敵の大將久吉が、首討取て立歸らん、やはか仕損じヤべきと、詞凉しき玉露がかめる色なき武家育、さもいさましく見へよける、かゝる所へ味方の郎等片山藤太、水よひたせる物身の、汗諸共よ押拭ひ仰の如く水中をくゝつて敵の陣所よ近付事の樣子を窺ふ所、猶も流るゝ水筋を、せき切る手當の石檜、或い土俵蛇籠の用意、是をさゝゆる清水が郎等、忍び入て水筋を、切んとあせれど敵陣の備へは名よあふ加藤正清近寄る軍兵事共せず、右と左よなぎ立て追立切伏られ水の哀れと流行清水が勢の敗軍い、目も當てられぬひざんの有樣、かくて空して時日を送らべ底のみくづと成行城兵ぬ賢慮有て然るべしと、息繼ぎあへず訴ふれべ、隆景い打默頭、かく迄敵よ取切れ、ぬけがけして高名せんとい、自殺を招く清水が城兵只此上い惠瓊老、宗治とヤ談せし如く、玉露諸共久吉が陣所へ立越、兩家和睦の計略こそ肝要ならんと隆景が詞よはつと頭を下、修羅の巷へ出家の身の、入べき筈いなけれ共危急を救ふも敎の道、玉露樣よいは用意有といさみ進めべ神妙〳〵、兩將へも此趣具よ某言上せん、イヤ兩人も本陣へ同道ヤ

さん來られよと物よ馴れたる小梅川、其名かんべし武士の、刃切れ尖き
直燒刃、きたひよきたふ隆景がはまれは、世〻よ、顯ハせり

○同五日の段

開醼山揮一同して風雨烈しき中國の、物騒がしき蛙が鼻、久吉公の陣館
亂杭高垣幕ゆひ廻し、兵具ひつしとならべしハ、事殿重よ見へよける、太
郎兵衛治郎兵と呼集め、落葉枯枝をかき寄せて、濕氣を拂ふ雜兵共、一つ
所よ寄集り、何と斯した所は、かんしやうゆうの煙りと出かけた、ヲヽ〻今
よも合戰といふたら戰場の切合、集錢山しの呑くらい、軍場の小商人の
手目上させてやらふ物何をいふても長の籠城、我身で我身の儘ならぬ
と、重き口から、からぞめき、ちんふん勘六智惠有顏、〻〻、尤なりいさまし
し、某迚も戰場よ出立なべ、彼唐士のあぼす東六が奇計を以て、鎗先尖き
御田樂申さしながら、闇喰、鬼殺しと見るならべ、あたり次第よ呑ほして

代物といふ大敵よハ、喰迚、呑迚早いが勝と惣〻か、咄しの耳を突拔鐘
こそ軍が始まると、達者な物は口斗、足もしどろよ立て行、ヲヽ事こそと加
藤正清、一間を出る庭先へ雜兵一人かけ來り、只今遠見いたせし所、あや
しの兩人陣中さして參るよし、引とらへて詮議よ及びハ所、郡高松兩城
方使者として、女一人僧一人、通しませうやと就へべき、使者と有れは捨
も置れず案内致せと、追つ立やり、待間程なく取次よ、從ひ來る藥月の使
者は二人の品形振の袂よ名香の、高き寺僧諸共よ使者の座よこそ、着き
よける、正清威儀を繕ひて、是は〳〵郡高松兩城方の使と有て珍事の御
兩人、お使者の趣承はり、加藤取次仕らん、樣子いかゞと正清が、尋ねよ愛
持玉露が、ハヲ、正清樣とやらお取次の段は苦勞よ存じます、自らは高松の
城將清水宗治が使玉露とヤ者、清水ヤ越るゝ趣は此方の家中浦邊山三
郎とヤお若衆樣ヤ其山三郎不慮よ城内を拔出たる不忠者、はかくせい

の由承はり、早く使者を以て所望よ及ぶといへ共、御歸し下されざる段我〻共不審はれず、もしや使の不念不骨なる事べし有て武士の意地を立ぬきは歸し下されんも計りがたし、此度い汝參つては機嫌の窺ひ、同道して立歸れと有使の口上、は前宜しくは披露と詞のあやも玉露が、詳よ相述る安德寺詞を正し、玉露のヤさるゝ通り、浦邊山三郎は郡の家人同前故、此方方も使を立るといへ共は承引なきよよつて、わたま役よ愚僧が使、とよもかくよも貴所の御執成偏よ頼存ると、頭を下れべ加藤正清、何事かと存せしよ、浦邊よ付て何日といひけふといひ、何か事も有そふなる三家の胸中、軍はわきへ取置て、福原梶田の勇將等馬を出さるゝい此虎之助一切合點參られ共、女義の使出家たるは方を、追返すもおとなげなし、取次い致しヤさんが暫時隙入事も有ん、われなる一問よ相待れよ、然らべ後刻と式禮目禮、玉露引連れ安德寺左右へ、こそい別れ行、朱

明の空も一面の、雲かけ隔つ浮草の、涙よ漂ふ山三郎、又降雨よ足音の紛れ出るもしめ〳〵と、いとゝうさをや重ぬらん、後のこなたよ玉露が、物昔嬉ひ立出る襖もそつと人目の閨壺ぬゑよしの顔と顔、なふなつかしの山三樣は身よか怪我いなかりしかと、縋り付いたる振袖のならぶ翼や連理の緣、妹背わりなく見へよける、是い思ひがけもなき玉露殿、何故爰へい來られしな、ヤイナ此城中へ入込しも兄樣の深き御思案、お前よ逢て力を合せ、眞柴を討てとくれ〳〵の仰、首尾能く仕負せ立歸らべ、誰憚らぬ夫婦中、手柄を見せて下さんせと、夫頼の女氣い、胸よやるせぞなかりける、扨〻、我もやたけとはやれ共、一かたならぬ名大將、猿冠者の猿智惠と聞しよ逆ふ眞柴久吉、此軍配よ我〻式が及べんや、所詮すご〳〵高松へい歸られず、清水殿へのヤ譯、只今腹切相果る、其方い立歸り此通り傳へてたべ、さらべと斗柄よ手を、かくる夫よ縋り付、待て下さんせ、姫ごせ

の身で敵城へ、お使者よ來るも何故ぞ、お前よ逢いたさ顔見たさ、死ぬ一所とかたらいしわたしをふり捨死ふとい、聞へぬはいな胴欲な、わたしを先へ手よかけて殺してやいの我夫と、命惜まぬ武家育、涙色めく婉艶の袂い、戀の淵ならん、涙隠して山三郎いらざるくり言噛まれよ、敵へもれてい互の耻辱、そこ放されよと突き退る、イヤ〳〵わたしも俱よとあらそふ後、早まるなと壁をかけ、立出る具柴筑前守久吉、高松方使者よ來りし玉露へ、山三郎を返しあたふる、又浦邊へい此書面、久吉が心を迄めし清水殿への送り物、此役目仕負せなば拔群の高名手柄、早々小舟よて歸城せよと、差出し給ふ情の賜、其文章はしらぬ共一先城へ立歸り共上生死を決せんと、心定めて押しいたゝき足早よてそかけ出れば、夫の跡よ引そふて命の親の久吉樣と、悦び足も地よ付かず、飛が如くよ立歸る、又も聞ゆる陣鐘よつれてかけくる女武者、金石ならねど湯王鍬万葉を

亂し都方、夜を日に繼だる阿野の局、久吉公よは見參とさゝへる組子事共せず、廣庭うたひ、歩みくる者共某よ逢んと有女武者、曲者なり共何程の事や有ん、對面して取せんず、若共引けとは下知の、聲聞取て阿野局、久吉殿かといふを押へてあたりを見廻し、音高し〳〵、は自分の形相一と方ならず、一大事の注進ならば、敵へもれては味方の非運、心を付て物語られよ、腹帶しつかと、即座の氣付、樣子はいかゞ、何と〳〵、されば、い春長公よい安土を出立まし〳〵て都本能寺よ入らせ給ひ、中國加勢のは手配諸軍を催す時こそ有れ、逆臣武智が夜討の企何光秀が謀叛とや、〳〵勝利はいかよ〳〵、明れば二日子の下刻水さへ音なき眞の闇、早洛陽よ亂れ入り夢驚かす俄の鬼塲、太刀よ具足もとぼしき寺内、數万の敵い甲冑よ身と固めたる小手脚當、味方い薄衣綾綿濃紅いの玉襷、白始闇丸兄弟、死地よ入たる働よ庫裏方丈も忽よ、血汐くま取修羅

辺の巷より迷ふ築山かげ、射つ射られつ切つきられつ劔の山、八寒地獄と
なる鎗は五臓を射抜君の弓勢、先手の軍兵一筋の髢、よつらなる三人五
人恐れをなして引退く、〳〵君よりは安体よてましますか、氣を付られ
よ阿野の局、〳〵君よりは安体よてましますか、心元なしいかよ〳〵〳〵
も便なき事ながら、運の盡きとて蘭丸殿、田嶋が手鉾よ無念の最期、勝よ
乘たる光秀方、味方ハ殘らず討死し、春長公よりは腹召れ、三法師君は、
若君様、ハ細川殿へ落しまいらせ、二條の御所も一時よ亡び火中の煙と
失給ふ、是ぞ筐のお家の御籠此上ハ久吉殿の智略よて、武智を討取亡我
君の怨靈よ、手向てたべや真柴殿と、死る今端の際迄も、君を大事とはり
語し心の花もがつくりと折てちり行貞心貞死、義女の鑑を殘しける、始
終の大樹開久吉、身体忽壞敗よ苦しめ、途方よくれて居たりしが、つ〳〵立
上り大音上、〳〵〳〵旁、我を謀女が不敵、只今某切捨たりと、諸軍の心迷ハさ

ぬ遊智人の名大將、先立主君亡人の生死ハ同じ梓弓吊ひよてそ入よけ、
る、無常よ傾く、夕陽ハ、坊主あたまものび欠び、時刻移ると安德寺恵瓊
ハ、咳拂ひしづ〳〵歩み獨言、此永の日中待せて置、返答もせぬ上よ、
鷹爪ハまだな事、皷屑一ぷく志さへなき大將、主腹ヲ肥すと見ゆる、餘り
な釣付け様佛の顔も三家の使、歸つて此由ヲ上んと行んとす、〳〵〳〵安德
寺恵瓊和尚、いづれへでざる久吉對面仕らんと聲かけられ、〳〵〳〵いや早
愚僧ハ生れ付いたる近飢、餘りの際入よ甚腹中窮困よせまり、一つ鉢の
ハ芳志よ預り度勝手へ參るといふを打消し、扨久吉が志の供養有事
を、眼前見捨て歸られるお僧の心底いぶかし、そて動くなと眞柴久吉、障
子をさつと押開き、上段よ飾置いたる金鴨の煙も薫ずる、手向草、心憎し
と尻目よかけ、〳〵〳〵大將の詞とも覺へず、出家たる我をいぶかり聊くなと
ハ、物を知らざる今の一言、〳〵〳〵いふな恵瓊、郡の大變立聞して、郡へ注進せ

んず心底隠しても隠されまじ、軍勢を引入れ、修羅を導く悪僧、寺領が望か知行が望か、返答聞かんと未前の具柴、屈せぬ惡瓊、大口明いて高笑ひ、べ〻ぬかしたり猿冠者、愚僧をとらへ悪僧とゝ何のたゝ言、僧が主たる春長ゝ、伊吹山の鬼の再來、諸寺諸山迄責苦しめ、佛敵遁がれず本能寺の庭よりかるてのたれ死したる尾田の幕下、主よ劣らぬあべれ者、五畿七道でくらひたらず、此中國迄攻下り民家を苦しめ人種を絶さんとする魔王の根元亡し絶すが佛の役、奇代の名劍請取れと、はつしと打べしつかと留べ〻〻、出家よ似合ぬよき嗜、童ふとりの坊主が悪口、久吉が耳よゝ入ぬ、誠相手よ成りたくゝ、天地の道理成佛の明らかなる事を悟りし上、相手よ成りて取らせんと、飽迄きびしき喇叭よ、奥歯砕くる無念の眼中、つか〳〵と立寄り、眼尻逆立息をつぎ、威勢よつのり人もなげ成今の悪言、當時安德寺の大寺を踏へる此惡瓊、童劣りとゝ何をいふや久吉、た

とへ大寺の名僧たり共、心中よ六道の迷ひ有てゝ、成佛の道思ひもよらず、汝が目より魔王と見拔し某か、天地の道理をしらせんと、惡瓊を目がけ打かけ給ふ以前の蓮花衣、是ゝいかよとためつすがめつ見て恟り、覺の袈裟ゝ矢剣の橋よて、天下を得ると見付置いたる奴殿かと軻れ果たる斗也久吉よつこと笑はせ給ひ、いかよ惡瓊老、共時ゝだいなしの一文奴、筭木皆物も當てよはならぬと貴僧の詞、後の證と共時よゞ請たるゝ共袈裟、矢剣の橋よて我相面見付し貴僧の天眼通、此久吉が望む出世よあられ共、天ゟ生ずる悪なれべわしくなる思ひそ惡瓊殿、此上ゝ尾田と郡の和を結べるゝが出家の役、よもや逆變ゝ有るまじと、名智の詞よ安德寺頭を摺付〳〵て、べ〻理非明白たる御仰訓狐といへる物ゝ夜ゝ微塵の虫をも見れ共、甚ゝ大山さへ見る事あたゝず、此坊主も具共ごとく、御身黒どんたる日かげの共時ゝよく奇相を見分れど今天下よ名を得、武威

向盤よかゝやく時は相見わたはず見損せし訓狐よ等しき此坊主、よ和
譜のに諂い冥加至極仰よ從ひ和談とゝのへ奉らんゞ、早速の會得い返
の名僧、一刻も早く急がれよと、仁者の詞よゞはつと、天より照す久吉の
威勢よ恐れ引かへす道い道なり明らかな心てらして立歸る跡見送つ
て久吉公、心をこらす軍慮の庭先、見越の松か枝はつしと射たる矢みい
いかよと、立寄てかなぐりひらけゞ返書の實名清水が自筆一紙の血判
つら〳〵と讀終つて表よ向ひ、ゞ、高松の城主清水氏、眞柴久吉が一書の
胸中射拔しい通ゝ、此上い三流を切落し諸人を助けあたふべし、いざ〳〵
是へと清水長左衛門宗治、兼て期したる討死の弓矢打捨庭上よとつか
と座し、ゞ、天運強き久吉殿、只今射込みし矢みの返書彌に承知下さる上
い、味方の助命頼み入ると、鎧脱き捨腹一文字よ引切苦痛、夫の跡をえた
ひくる、妻は手負と見るよりも、のふいたいしや悲しやな斯したに最期

させまい爲郡一家の人〻ゟ、わたしと以てのに教訓無よなすのみかい
たいけな、此子い可愛ふないかいなと夫よ縋り伏轉ひ前後もわかず泣
居たる宗治苦しき目を見ひらき、ゞ、愚や女房何くり言、郡三家の人〻い
某が胸中をよくに存知そち達親子よ今生の、暇乞をさせんず爲のに情
ゞ冥加なや、有がたや、一才の時よりもくらひ込んたる大祿の恩義いい
つか謝すべきぞ、夫よ引かへ小知の銘〻主恩よ命を捨る數万人の最期
をい助けん爲の此切腹玉露山三が密書の使心を込めし久吉の書中、味
方よ取ていい盲龜の浮木悦べ女房何はへる氣を張詰めて悴をゞよき武
士よ仕立上、主君よ忠義を怠るなと高松の良將も、子故よくらむ深手の
苦痛、見るよ付ても彌増る夫の最期稚子の行末、思ひやり梅い女の浅い
心から、大守の仰誠ぞと斯した別をと知ずしてお跡をしたいきた物を
暇乞さへろく〳〵よ云たい事の數〻を、いつの世いつの添ぶしよ語ら

ふ物ぞ情なや〳〵何よるしらぬ稚子さへ虫が敵へる寐覺の愛てうち〳〵ゝ父上の、今端を拜む合掌ぞやといだきしめ〳〵伏轉びたる女紙を、不便と察する久吉公こたへてたゆる宗治か恩愛一度よたるもちかれ清水涌くるはら〳〵涙血水川邊よ涙越て土砂吹飛す如く也哀を見捨て眞柴久吉かしこを屹度打見やり〳〵見られよ兩人相圖を以て川筋の土俵岩石嫌ひなく、切て落せばあり〳〵と平地とおさまり城外へ遁れ出たる老若の悦びの聲鯨波、コレ見物、あれと大將の敵よはつと心付、幸ひ成かな是よ物見と、よろぼひ〳〵腹帶をつかと白布の、高見を傳ひよぢ登り、見ひらくまぶたよ高笑ひ、ゝゝ、女房悦べ、死後の思ひ出此上なし、浮世の夢るけふ限り昨日の敵ゝむれゐる白鷗、鯨波と聲へしゝ、浦風とこそ聞へけり、我ゝあしたの露ときへ清水流るゝ柳かげをばしが程の世の中よ心のこさぬおさらばと、白布とかんとする所へ、〳〵宗治を、

ばし〳〵、小梅川隆景安德寺が理解よよつて尾田家一体水魚の因、見屆けて成佛有れと、聲諸共よ大將隆景、衣服改めをづ〳〵と入來る跡よ安德寺、手よ捧けたる白蠻ゝ神文とこそ見へよけり、互よ和義を取納め、惠瓊ゝ神文押いたゝき、〳〵、目出たく和睦とゝなふ上ゝ揚僧ゝお先へ歸り、久吉公の御神文兩家へさし上奉らんと、禮義も足もいさみ立、衣しぼつて歸らるゝ、久吉ゝ詞をあらため、兩家和順よおよぶ上ゝ何をかつゝまん、主君尾田殿都ホ能寺よおゐて、武智が爲よは落命を、聲かきくるる一と申、万里よみちて、袖しぼる、驚く人々制する眞柴、たるみを見せじとつゝ立上り、主人の敵武智光秀、都よ登り吊ひ軍三家の助力あるやいかよと、聞より隆景よつこと笑ひ、〳〵、軍のそなへ有ながら手をむなしくせし味方の若者、ときたて置たる弓矢の手前、ねがふてるなき後語の加勢、隆景采をなしゆさん、〳〵、頼るもし〳〵、早上京の用意をなさん、者ども早

くとは下知よ、加藤正清始とし人馬せべしと居ならんだり、うれひよし
づむやり梅をいさめなだめて隆景公、父よ劣らぬものゝふと小梅川が
成人させん、心殘さず旅立と、こゝる情よにつこと笑ふがいとまごひ、此
世の念る宗治が、忠義の家名稚子をもうりそだつる仁者の道、雪きれ空
る青〳〵と、天王山の晴いくさ、名をとる射とる弓矢とる、天下を鳥の聲
よつれ、いざや武智を討んずと勇む正清兩將る、都をさして出て行く

○同六日の段

扨る逆賊武智光秀、多年の恨一戰よ春長父子を討奉り、妙心寺よ砦を構
へ勝はつたる諸軍の勢ひ、俱よ威風を顯して備へ嚴しく守りゐる、小
夷よい光秀の母さつき、褥の上よ座をしめて、イヤ〳〵四王天、何事も見ざる
聞かざる云いざるよ、咄しが有らば嫁女庚申待、綾りと聞かふドリヤ奥へい
て夢でも見ましよと、立を引き留田島頭、後室様のは立腹、其理なきよい

有ね其夫れい一途の思し召、幕下と成つて春長へ、身を寄せたまひしは
大將時を得て其機よ臨い、天の時を知といふ、何卒は機嫌直されて光秀
公よは對顏、偏よ願奉ると願へべ俱よ嫁探只幾重よもと手を突て、願ふ
心の夫思ひ、道理よも又殊勝なり、さつきい少し面を和らげ、夫程よ迄皆
の衆が、頼みを聞ぬる年寄のかた意路、そんなら息子殿の歸り、次第奥へ
去らしや、ヨリヤ女共い來て腰を打、ヤア〳〵と老の立居もおも〳〵と、嫁が介抱
四王天、引添てこそ入りよける、斯たる世よも花開く、色香もしるき初菊
が、奥の透間を立出て、ぼんよヤア此重次郎様い、しんきなお方でい有るい
いなつてちの思ふ様よもない、間がな透がな軍學とやら色の道よい疎い
ので、一倍心をいためると、女心の物思ひ後よ立聞く重次郎、初菊殿是よ
かと、いふ聲聞いて、ヤア重次郎様かゝ、聞へぬわいなと計りよて跡い得言
ぬ、おぼこさい赤らむ顏よ顯はせり、是い又嗜みやいのふ、又してる〳〵、

顔さへ見れば恨のたらく、親〻の慈しを受け、コレ未來永〻かゝらぬ女夫、少しも隔ゐないわいの、イヤ〳〵つんとるふ、しんきな永〻とやら未來とやら、其先の世ゐ、しらね共、緑を、結ぶの神様が、ゐ苦勞なされうない子の、ふり分け髪の其中から、あれと是との結び合、親の慈しる有る物を、ついよ一度の逢瀬さへないゐ、餘り胴欲な、お情ないと娘氣の、胸の有りたけかきくどき恨かこつぞ道理なり、思ひゐ同じ重次郎るふ今迄ゐ不調法、以後ゐ急度嗜む程よ、コレ赦してたる〳〵、そんなら願ひを、ハテ誰情からぬ云号、世間廣ふ遠慮ゐいらぬ、モシ、添や嬉しやと、ひつたり抱付く妹と脊よ、わりなく見へしゑよし也、折から聽く轡の音、光秀公のお歸りと、しらせよ惚り飛退く二人、所休繕ふてなたゑ、妻の操る出向ひ、待間程なく立歸る武智十兵衛光秀、武威凛かす强將の常よかゐりし屈託顔、席を改め詞を正し、三人共出向ひ太儀、ヤ母人よゐゐ機嫌よくお渡りなさる

か、サアイナア先程る田島頭と自がわつしくといつ、どふやら斯やらお口が和らぎ、母公様とも睦じう、ムヽ、ホヽ、夫れゐ重疊出かいた〳〵、左有らば直様ゐ對面イヽヤ夫よゐ及ばぬ、母が直〻參らんと聲うちかけを引かへて、木綿布子よ風呂敷包、せなよちよつこり賤の女の姿、見るゑ驚く人〻、樣ゐ傍よ摺寄つて、系圖正しき武智のゐ家、殊更四海の武將とも仰がれ給ふ夫光秀、天下のゐ母公様共云ゐるゝゐ身が淺ましきお姿ゐ若やお心遣ひしかと、尋ねよつと打笑ひ、ホヽ、添くも清和源氏の嫡流たる武智の系圖、元より武勇の家柄なれば、誰よ恥べき謂なし、老ゐ寄れ共心ゐ鉄石、渴して盜泉の水を呑ずとゐ、お身達るよふ知てゐやる筈、心穢れた我子の傍片時る虚を同じうせんゐ、我日本の神明へ、恐れ有り〳〵、伯夷叔齊をならひ只雲水よ從ふて出行母、是が此世の別れぞと、義强き母も恩愛の涙まぎらす有樣ゐいとゝ哀ぞ增りける、光秀ゐ默然とさし俯ひていたり

しが、操の方へ涙ながら、コレヤ我夫、母様の只お一人、いづくを當と長の旅、なせお留なされませぬぞ、ヤ、不忠不孝とのはさげすみ、今更ヤす詰もなく、せめてへ母のお心よさからへぬが寸志の孝、四海の内へ此光秀が掌よ有る、おとめヤな共儘〳〵、ヤ、迫へ悪人程有て根強い魂、ヤエ、云ん方なき人外めとよらむ目元よはら〳〵と涙かくして立出る、心のはり弓強弓の引ぞ煩ふ嫁孫の中よ悲しき初菊が、是のふヤ祖母様と扣へる手先ふり拂ひ、見返りもせず出て行、はつと泣き出す人々を、制しとゞめて、コヤ〳〵者共、母人のは行衛いづく迄も見届けよ、はヤ手道具の用意〳〵と光秀が鶴の一聲あまたの軍卒、箙筒長持狭箱、其外雑具鋤乗物、はヤ母公様のお姿を、見失ふなと足早よ跡を、ゑたふて急き行、影見送りて光秀へ、何角心よ打うなづき、奥操躬重次郎、嫁初菊諸とも次へ立ちやれ、用事あらば手を鳴すと、心有げな詞のはし、ハイとへいへど立兼る、ヤヤぐず〳〵と何を猶豫

早く立よときめ付けられ、心へ跡よ殘れ共親子三人打連て、是非なく、次へ入相の鐘が無常を告渡る、實物凄き庭の面、忍び出たる四王天、主君の樣子いかゝぞと、身を潛めてぞ窺ひゐる、夫とへしらぬ光秀が、有合硯引寄て、筆くゝゑめし唐紙の、表よ何やらさら〳〵〳〵かくと、見るが重次郎瞬もせず物陰よ、守りゐる共、白書院、只一心よ書認め、筆投捨てむんづと座し、諸肌寇げ指添を、拔や玉ちる氷の刃やゝ打詠め両眼よ、はら〳〵涙くいしばり、既よ斯よと見へければ、主從小影を走り出、ヤレ早まり給ふな父上と、取付く重次郎四王天鏡の如き両眼を、くゝつと見開き聲震はし、コレ我君、コリヤこなた狂氣召れたの、今朝が始終の樣子、心得がたく思ふ故、萬事心を付る某、物陰が窺へば、出し顔よ辭世の一句、順逆二門なし、大道心深よ徹す五十五年の夢覺來て、一元よ歸すとへ何のたゝ言、君臣を見る事塵芥の如くせば、臣君を見る事怨敵の如しと、春長猛威よ增長して、神

社佛閣を燒失し萬民の苦しむる暴惡、神明是を誅するゝ、光秀のゝ手をもつて討し給ふ天の與ふるを取らざれは災ひ其身ゝ歸す、左程の事をヤさず共、よくゝ合點のて、なた樣、切腹とゝ馬鹿〳〵しい、人はしらず此四王天田島頭殺す事罷ならぬと居丈高、そふ宏や〳〵、父の命は我〻始万卒ゝ至る迄、ゝ一身ゝ及ふゝ命、臣義を守る共、君是を補助せざれゝ大將とはヤされず、只生害いとゝまり給ひ、下万民の苦しみを救ひ給へと右左り、涙と俱ゝ諫めの詞、光秀はたと横手を打〻、誤つたり〳〵、一天の君のゝ爲ゝは、惜からざりし此命、暫しゝながらへ事を計らん、先ゝ給旨を乞受て、猶も背かん者共を恐く誅戮せん、急き是ゝ我は參内、汝ら二人は久吉が、都へ登るを半途ゝ待受、一戰ゝぼつ返せよ、イヤ裝束をと立上がれば、近習小性が心得て運ぶ、大紋立ゑぼし、立派ゝ着なす、骨柄ゝ逸り輝く共粧ひ、早引出す栗毛の駒、光秀ゆらりと打乘て、ヤア〳〵亘次郎、田島頭諸共ゝ西國へ馳向ひ、必共ゝ、油斷なく軍功を顯ゝせよと詞ゝはつと四王天〻〻、君、御出陣ゝ及はず共、某彼地ゝ向ひなば、猿冠者めが素頭を討取るゝ手裏ゝ有、アイヤ〳〵彼も知れ物、定て遠き計畧有らん、コハ親人の詞共覺へず、父ゝかはつて某が、軍配取て一戰ゝ敵の首を實檢ゝ備へん、コレ氣づかひ有なと勇みすゝみし我子の骨柄、天晴〳〵、潔よし、我も跡ゝ出陣と、手綱かいくりしと〳〵、乘出す駿足馬上の達者、轡の音ゝ秋の野の虫ゝゝ有でりん〳〵〳〵、給旨をやがて頭ゝ戴き刃向ふやつ原打立て、追立切りちらし追付け四海ゝ樂を伸ん、いそふれやつといつさんゝ大内山へと、急き行

○七日の段

接化隨緣眞實ゝ無量の惠み洩ざれ共、佛敵猛威の春長ゝ世を狹められ鰐亟成、無念ながらも杉の森背をかまへゆゝしくも、寄手を防ぐ唯一心、

矢叫びの音喬の聲天地よ、滿て動搖せり、かゝるけゝしき其中よ、媚きつたふ妹共、軍よ馴て氣ゝ張弓襷鉢巻腰刀、逞ゆゝしき身の備へ、中よ小笹が才發顔、のふ涙江、何とテ騒がしい世界でゝないかいの、切た〳〵と切つはつゝを世渡りよまだ仕たらいで春長殿慶覺樣を相人よ取り憎てらしい軍事ヲ追付け如來樣の罰が當り、首がころりと飛で、あろといへゞ兵卒ロゝよ、飛とも〳〵一向一心にかたまつたる我ゝ、殊更ほ主人喜多ノ頭樣の軍配、石山よおいても度ゝの勝軍、負る事ゝけんよよもない事、殘多いゝ王樣のほ挨拶、あたまの役でおとなしく丸ふ納めて慶覺樣が石山の砦を引拂ひ此杉の森へほ陣がへ、しやうこりもなく又寄せかけた尾田の大軍、どつと寄ても不可思議光如來のお力よや叶ひませぬじやないかいなあいな、あいな、待つたり、叶ゝぬ次手よおいとしいゝ若旦那孫市樣、尾田と和睦が破れた計よほ使の越度じやと詫

ほ樣のほ勘當、何と可内、ほ詫の願ひを一統よ、去て見る心はないかいやいと、おろ〳〵涙惣ゝが、すゝり上たる水涕も、忠義のはしと殊勝也、斯ともれ聞く一間も、孫市が妻の雪の谷、我子の手を引きしとやかよ出る姿もおのづから、思ひ有る身の打しほれぼんよ主なり家來なりと、思ふて佛しいそち達が志し、聞く嬉しさよいと〻猶、悲しき夫のお身の末、どふなる事と自が、心の内を推量してたもやいのふと有りけれゞ、妹姉士卒共、顔見合せて詞なし、娘松代ゝ母の顔、打詠め〳〵、ヤ母樣おまへは何をむつかるぞ、同玄樣よ皆迄も何を泣きやる、早ふと〻樣や弟の重若を呼まして來てくれやい、此間の淸書をお目よかけて、褒てもらいたいわいのふ、譽てもらひたからふ、そなたより此母が逢たさゝ山々、暫しが間も母の傍、得放れぬわの重若、定めて泣てゞつかりゐるで有、かはいの者やとくいしゞり、泣音を包む雪の谷が心の内ぞ、せつなけれ、襖のあな

たゞ重成が高らかゞ咳拂ひ、扨い見君のお出なるぞと、いふゞ心得姫が、席を下れば雜兵共地ゞ鼻付けてかつ跪ひ待間程なく悠然と、立出る鰹喜多、頭、不興氣ゞあたりを見廻し、女原、此所ゞ用事ゝない次へ立ち、軍卒共も何をうつかり、要害を頼みゞ搦手の守り怠るゝ一大事、早くまはつて心を付けよ、行け〳〵とおつ立やり、嫁女、そなたゞも云聞かし、慢ばす事が有ぞや、ア私に慢べす事が有とは意遊べすゝ、夫孫市殿のこゝ扨、又しても不吉者の悴が事、左樣な事でおりない、當月二日の曉ゞ天文の考みし所、東ゞ當つて白氣自然と立登る、是則敵の大將、春長が腹身と頼む勇者の内ゞ變心の者有て、事をやぶるの前表、今日迄口外せざれ共數日の籠城お身も定て心勞と思ふから、安堵させん爲ヤ聞す、見ゞ〳〵追付世を廣ふ、足利の正統たる慶君のは代となさん、何と此上もなき慢びでゝおりないかと、未前を察す明智の眼力、こなたは一迄ゞ夫思ひよき折からとすり寄て、もふお嬉しい段ぢやござりませぬ、がとふぞ成ふ事なら、其白氣とやらが立ちましたが、孫市殿のは勘當がゆりたすとといふしらせなら、ほんゞとの樣ゞ嬉しう存ぜませうぞ、憚りながら慶君樣とは一所ゞどふぞ世ゞ出られます樣ゞ、親はのお宏ひお情でと、いふを打けしこまだしつこい、かゝるめで度折からゞよしなきたい言聞きたくない、お身も孫を連て部屋へ行きやれ、何をぐず〳〵、早く立ちやれとかみ付られ、何とせん方投首し娘松代を伴ひて、しほ〳〵立て入ゞける、跡ゞ重成只一人立上つて、通路の鈴、引ならせば一間のは簾、さつと小性がかゝぐれば念珠他事なき慶君、重成が音づれ何事か有やらんと、仰ゞはつと頭を上、今朝方は機嫌を窺ひ奉らんと存ずれ共、敵の朝がけ短兵急ゞ寄たれば軍配ゞ暇なく、一泡吹せ味方の勝利、攻口を退きゝへば、一息の間と漸〳〵只今は前へ伺公、不禮の段ゝは高免と敬ひ、深

く逃けれべ誠忠俊久の一人時よ合ねい、此程なの心勞推察せり、兄義輝君い三好松永が爲よ亡び給ひ、今又我い春長が爲よ斯のとし、よしなき命ながらへて萬民士炭の苦しみと云ひ、詩卒の命を失いんより、早く我一命を斷、萬死を救ひ得させよと、目を閉て稱名を唱へ給へべ重成も君の恵の有がた涙、胸よふさへて氣色をかへ、云かいなきは仰、夫れ軍い和よ有て楽よあらず、馬洗廐發よ、等しき尾田の弱兵何程の事や有ん、凱歌を上るい暇く内、君よもしろし召如く、國大なるといへ共戰ひを好めべ必ず亡ぶと、近くい武田勝頼、父信玄迄共威隣國よならぶ者なく猛虎の如く、諸侯も恐れいへ共勇よほこり、武よ慢したる太郎勝頼、累代の武名も一時よ朽ぬ、春長迄も先共如く、は心弱くて叶いじといさめ申せべ慶覺法師、打うなづかせ給ひつゝ、重成來れとは座をべ立せ給へる共所へ、大息ついて鷲森八郎、は注進と手を突べ、八〻いよかと仰の下され

べい軍は味方の勝利なれ共、力責よは叶はじと、數千の軍よ燒草を積乘て樵〳〵の共下へ、山の如くよ積重ね、たゞ燒打よと云せも立ず、喜多頭はつたとねめ付け、馬鹿〳〵しい何のたは言、其薪こそ身が申付けたる一つの計策、は大將のは前なるぞ鹿忽の注進、早く立てとわざと怒りの一言もしらで鷲森八郎は、拍子ぬけ〳〵引かへせべ、いざは入と八方よ、心を配る重成が、底意をくみて慶覺君奥殿さして入給ふ、夏の日の長きも我を、恨むなる、物思へとや夕暮の、空を、待けり孫市が肩よしつかり鎧櫃、人目を忍ぶ陣笠の、歩よやつしたる俤は、昔よかはる勘當の、身は猶更よ心の隔何とせんかた切戸口、イむ、こなたの茂みなを忍び出たる大の男あたりうそ〳〵、覗ひ足、奥を目がけて忍び行、後の方なを、孫市が、曲者やらぬと腰をむんづと組で引戻す、ちよこオすなと振はどき、直よ拔討ち刃の光り、かいくゝつて拔合はし手練の切先はつし〳〵、打合刃音

何事と、手燭片手ゑ立出る雪の谷、火影を覆ひ物陰ゑ息を詰てぞ守り居る庭ゑは二人が上段、下段、飛鳥の働き孫市が難なく曲者切倒し、のつかゝつて、とゞめの刀、血押拭ひ刀を鞘、納る丈夫死骸の懐中、探る手先ゑ取出す一書、扨ゝと月ゑすかし見て、ムヽヤ當月三日ゑ春長父子、光秀が爲ゑ亡びしとな、、心地よや嬉しやと悦び勇む後ゑは、紛ふ方なき夫の聲、飛立計走り寄、逢たかつたと縋り付嬉し涙だ先立てり、夫も遠夫婦の愛情やゝ打うるむ目をしばたゝき、誠や他ぬ夫婦が銘〻ゑ、躬を連て思はぬ離別、父の勘氣を蒙りしも、暴悪非道の尾田春長、約を變せし故なれば、何卒きやつが首討取り親人の實檢ゑ備へなば、拙當詫の綱ゑもと、心いやたけゑはやれ共、悴重若召連ては、足手纏ひと未練ゑも子ゑ引されて迷る月日、鉄炮疵ゑて脚さへも思ふゑ任せぬ畸人者、武運ゑ盡し我身の上、せめては主君親人のお役ゑ立て死ん物と、覺悟極る今日只今死後ゑ頼

む、ゝ二人の子供、心得たるかと夫の詞、聞ゑ女房が泣出す、其口押へて、コリヤ親人のお耳ゑ入らば返つて坊げ、悴を手渡しと、かたへに直せし鎧櫃、蓋取退れば重若が、かゝ様のふと走り出縋り歎けば母親も、胸ゑ涙の滿汐の引くや血脉と、奥よりも姉の松代が聲聞付け、おとゝ様のお歸りか、重若も戻つてか嬉しい〳〵、早ふ遊ぼと手をたゝき悦ぶ姉弟雪の谷が、膝ゑ引寄せ聲曇らせ、嬉しかろ〳〵、何ぼふ其様ゑ悦びやつてもの、久しぶりでお目ゑかゝつたとゝ様は、腹を切ねはならぬといのふ、コレ孫市殿、是を見てかいのふ、何ゑも去らぬ二人の子供、お前は可愛ふござんせぬか、此姉弟をふり向けて、死る覺悟を極たとゝ、餘り氣強い胴欲な、武士が立ても捨つても、死さぬ〳〵死さぬと、かきくどくのも、忍び音ゑ奥へ、悼るうき涙、道理としれど聲ゑ角立、未練至極の其ほへ頼弓矢取身の切腹ゝ此身の本懐、今計らずも寄手の大將、是角六郎を討て捨、懐中の一

書を見れば、都本能寺よりおゐて春長父子、光秀が爲より討死と、春孝らの云らせの密書、此騒動より寄手の奴原、一旦圍みゐ開く共、再び寄せんゐ必定たり、危急を救ふは此孫市、君と父との命よかゐり、首を則ち久吉が陣所より送り和を乞ば、元より寛仁大度の具柴、よもや違背ゐ致すまじ使ゐ悴重若丸、兼て認め置たる一書、斯迄思ひ込だる某、妨げなす不所存者、二人の子供爰へてよ、兄弟ともよとしゝが子か又母が子か、云て聞かさば賢ひ者と、撫つさすりつ尋るも、胸より無量の思ひ有、心よしらで弟の重若と〻様、わしゐお前の子でござるゐいの、何ぞやとゝが子ぞや、よく云た出かしたなあ、ヤ姉の松代ゐどふぞや〳〵と、問ど年だけうぢ〳〵と母より氣兼の言兼れば、返事のないは嗚が子か、我子でなくば出てうせうと、呵り付けられ泣〳〵も、何のかゝ様の子ぞやでござりませぬ、とゝ様の子でござります、そちも我子となア、よく云た出かしたなアとゝが

子ならば、身が云い付る事背きゐせまい、アノ親の云ふ事聞ぬ者は不孝者ぞやとかゝ様が常〻からのお呵り、どんな事でも聞きまするのふ、重若そなたも云ふ事聞きやるかやアイよふ云ふ事を聞くはいのふ、ヤ〻扨〻ういやつ、然らばヤ付る役目が有、今とゝが此短刀を腹へ突立たらばなヨ、此刀と脇差よて身が首を引切、此一書を添て久吉殿へ持參せば此上もなき孝行者、合點がいたかと細やかよ、云敢ゆれば驚く母、よらみ付られくいしばる親の心はしらぬ子の譯も七つ子重若丸、そんならとゝ様の首を此脇差で切と、孝行よなりますかや、ヤ〻なる共〻日本一の大孝心コレ姉様も合點かやアヤ早ふ腹切て下されと、いふよたまらず母親が、我子引退ニ、忌ゐしい子供でゐ有はいのふ、コレ孫市殿、いかよ望が立たい迚何辨へない此子供より、親を殺せと敢る人が又と世界より有ふかいのふ、夫や我子を安穏より世たい斗よとやかくと、心を盡す女房を思ゐぬ仕方情な

い親の別れも身の科も辨へしらぬ佛樣、鬼よせうとは胴欲なせめて此子が生先を見届る迄生て居て下さりますが親の慈悲、頼むはいのと計よて譯も、詞も涙川膝よ漲る風情なり、益なき浮聞たくない、三千世界よ子を思ハぬ、親が有ふかうつけ者、左程躬よ此首を討たしがたく思ひなべ、子供よかはつて介錯せよ、夫ハ、得心なくべ縁切ふか、ゑやといふて是がコヤ未練至極の其ほへ煩、所詮介錯思ひも寄らず、見さげ果たる女めと、取て引寄せ、提緒の早縄、庭木の杉よゑつかりと結ふ妹脊の亂れ口、こがるゝ其身ハ梢の猿、鵙を斷うき思ひ母の有樣見るよりも二人の子供ハおと〳〵顔、コレ〳〵松代、重若もとゝ樣の兩の手よ取り付て居やゝ、必ず放してたもるなと、あせれど夢か現なき、夫ハ今を最期ぞと、諸肌脱べ弟の重若、とゝ樣もふかや、今が親への孝行時と、言つゝ短刀我腹へぐつと立べはつと散る、から紅ひに目もくらみ心も消る雪の谷が間路

をたどる思ひよて正躰もなく伏沈む、歎きの折も一間よ、コレ躬其刀引廻すな、云ふ事有りと突重成、ゑづ〳〵と立出、本、迫忠臣よくしたり、今こそ勘當赦しくれる、是を此世の思ひ出よ、心静よ最期をとげよ、とハ云ながら二人の孫、親の死別も夢現、嘸成人の其後ハ、歎くで有ふ恨みおらふと、思へべ不便弥増て、我ハ老木の末近く、便とするハ母の親、ひでい祖父ゑやと、コリヤ恨でばしくれるなよ、我迎も骨肉の躬を見殺す胸の内どの樣よ有ふと思ふぞいやいヤ、是非もなき次第やと、胸よ湯玉の湧返る、親の思ひの有難涙見上、見おろす一世の別れ、手負ハ涙おしとゞめ、コレ有難き父の恵忠孝全く望ハ足ぬ、ナヤ重若松代、最前とゝが中付たる役目ハ只今早く〳〵、コレ〳〵必ず切まい、切たらべ母があつゝをすゆるぞやとおどせべ迫子、ミヤガ必よ、ひかゆる手先、ナヤ詞背くと子でないぞ、とゝ樣のゆ用を聞とかゝ樣が阿らしやる其嘆樣ハあの樣よ縛られて居やつしやる、コレ重若、

かゝ様の、ア縄をとゞいて上げてたもいのふ、ヤア夫れでもあの様よ白眼しやるもの、ヤ何ほど阿らしやつても大事ない、此縄といてたもいのふ、ヨレヤ見ぬ様、同玄様よ脇見せずとなせとめて下さりませぬぞ、現在孫を親殺しよするが情か玄ひかひのふ此縄といて下されと、頼む嫁より頼まるゝ、見が胸の苦しさを、こたゆるつらさ被面い、涙よ増る思ひ也、斯ていい果じと孫市い、我子の腕先持添て、しつかと當れゞぐはんせなく、ともよ力身て、とゝ様斯かやゝ、そう玄や出かす、〳〵も一世の別れ、二世の名殘と雪の谷か消る間を待つ夫の命、神も佛もない事かと、亂るゝ心亂れ髪血汐爭ふ血の涙、上よい父が稱名の、聲諸共よ、りんの音、慶覺君い他念なく南無あみだ佛、〳〵、なむあみだ佛の回向の恩德廉大、不思議よて往相回向の利益よて還相回向よ回入せり、聲い如來の迎ひぞと、ゑい〳〵〳〵と孫市が首い前よぞ落よけり、わつと、恐れて、飛退子供、母い共儘打倒れ

前後不覺よ、泣き叫ぶ、始終見届け重成が目よ持つ涙押拭ひ、生者必滅の理り今日の前よ見るも夢、せめて夫の切首よ、暇乞をと立ち上り、縄ときはどけゞ雪の谷い、其儘首よしがみ付き、慧悟故とは云ひながら、いとし可愛い姉弟よ、嘸や心が殘るであろ、魂魄去らずゞ今一度、物云てたべ孫市殿、我夫のふと押し動かし、蠶ぬ名殘の百千行、聲を限りよ泣き叫べゞ、其歎きい理りながら、主君へ忠死の努が功し、出かしをつたと譽そやす、親が心を推量せよ、不便と斗り詞數、云ぬ心のせつなさを、思ひやつたる雪の谷が、正体涙の聲を上げ、家を忘れ身を忘れ討死するい武士の習ひと覺悟しながらも、得諦ぬい女だけか救しなされて下さりませ、長い別れと云らぬ子の常の遊びか何ぞの様に、親の首をゞむごらしい、切が手柄よ成るといふ教い外よ情ない、いかなる宿世の報ひぞとくどき立てたる思愛の、心はひとつ重成も、咽き繁くばら〳〵〳〵、涙い雨か夕雨

の車軸を飛す如く也折しも吹來る風に連れ響く貝鐘賣鼓、又も敵や寄くるかと、驚く雪の谷騒がぬ老人、思ひがけなくかしこより、足利の正統たる慶覺君をば迎ひの爲、中川清秀參上せりと呼ん〳〵、入來る清秀、喜多、頭ゐくゐつとせき立ち、和議を破りし無道の春長、其祿を喰中川瀬平、納過ぎたる上下衣服、迎ひとゐ何のたは言、一旦の憤りゐ尤至極、此度の合戰ゐは舍弟春孝殿、事を計りし禮を亂す、去よつて兵柴久吉、内意をもつて立越しゐ密よ都へ供奉せん爲、早御用意と云せも立ず、逆賊光秀が爲よ自殺せし春長父子、知るまいと思ふかや、石山方よ、名を得たる鱸喜多、頭重成眼ゐ日月、及べぬ事をときめ付くれべ、清秀猶も詞をつくし、成程推量の如く當月二日、都本能寺よおゐて主君の横死、愁ひよ沈む我々僞りの有るべきや、取分け子息孫市殿、死を以て久吉殿へ願ひの一條、今より一子重若丸父の忠義を頭よ戴き、二代の鱸孫市と名も

改る兩家の和睦、慶覺君のは本願照すも法の道廣く、やがて目出たき樂へをと情の詞よ疑念も散じ、〳〵誤つたり〳〵、今程厚志の具柴中川躬が願ひ我君の法の門出一時よ開け此上もなき我悦び、〳〵嫁女、孫が手柄は二代の忠臣歎きの中の悦びと、員の詞聞よ付け、いとゞ涙よ雪の谷がいらへも更よ泣斗、早は立の刻限と追〳〵警固の諸軍勢、見るより重成手を打て、万事よ馴し清秀殿、我君へ此樣子ヤ上んと立上がれべ、〳〵聞迄もなし、とくゟ慶覺是よ有ると、ゑづ〳〵と立出給へべ、はつと恐る〳〵二人の勇士、慶覺君ゐは衣の袖ゑぼりたまひていかよ旁、孫市が忠死よより万死を出しも佛の惠み、久吉が情の計ひ、又清秀と、やらんが志し過分至極とのたまへべ、清秀なをも敬ひ深く、有がたき君のは諚、此上ゐは心置きなく早鷄鳴よ程近し、いざは發駕とすゝめよ君ゐ、おり立給へべ、暫くは門出を壽きの孫、めが一さし、は上覽よ入れ奉らん、嫁女常〳〵敬

へし扇の一手早く、〳〵と見の詞、涙ながらよ、取上ぐる、皷のしらべ、重若が祖父様、謡をうたふてやと、扇を去やんと、身の備へ、あら目出たや末廣の、君の榮へは万〻歳と祝しけり、拍子よつれて稚子のかなで、祝する末廣の、其一曲は末の世よ、名をとゞめたる鱸がおとり、因縁斯としられたり、いざは立ちと清秀が、詞よくり出す、行列の、おさへは二代の鱸孫市、武士の鎧となる鐘の音もろともよあけて行、夜もしら〳〵と白鷺の森をはなれて、飛びてふも、君のさかへを白鳥の、神の應護と勇み立ち都の空へと、供奉しけり

○同八日の段

あはれむべし、英雄の武將刃の霜と消て行く、内大臣春長公けふ一七日の大法事と老若男女わかちなく、參詣群集を當よして見せ物、輕業力持戦國の世も下〻の、身過よかはりなかりける、所の百姓引連てのさ〳〵

邪る陣張甚助、茶やが床几よ腰打かけ、庄や太郎作とやら、此度尾田春長の法事い、主人武智左馬介様のは差圖、情を以て萬事は宥免有れば、付上がりのした百姓共、誰が赦して、輕業去やの、曲持のと仰〻しいふるまい、外い格別、當村い此陣張甚助が支配、立ふとふせふと身共次第、小家がけ茶やよ至る迄、今日中よ取拂へと、主の威光よ肩ひぢはり、さも大へいよ罵れば、庄や太郎作あたまをかき、其お腹立いは尤でござりますれど、又しても〳〵、ヱヽくわわで村〻い亂が騒、此頃武智光秀様、將軍とやらよお成りなされ、少しでも〻穏、其悦びの參詣群集、せめて四五日は用捨をと、言つ〻腰の早道を、取出す小錢茶碗ようつし、ヱヽお一つと差出せば、手よ取り上て惚りし、よらんだ眼いどこへやら、くはらりとかはるからくり的、ヘヘヘヘヘヘイヤ何庄や、ヘヘヘヘヘヘ何かいやい主人光秀公が天下を去ろし召、其は悦びとあれば苦しふない〳〵、輕業成りと、唐の芝居なりと勝手

次第、拙者元來茶が好だが、大服よしてかへてくれる氣ないかと、肩からはへた爪長代官、百姓共ゝ口揃へ、何が扨〳〵、なんぼい成りとは遠慮なしよ、おかへなされて下さりませ、然らべとふぞ今一ぱい所望〳〵と差出され、めい〳〵紙入巾着を、さらへて漸〳〵八分目、左少ながらと差出せば、是ゝ〳〵重ゝのは馳走、いやもふ此お茶さへ下さらべ、少ゝゝ拙者の天窓で、土佐踊なされても苦しからず、用事あらべ承らん、必心置れなと、欲よ目のないよこ〳〵笑顔してやつたと百姓共、庄やを先に立上り、又もやは意のかはらぬ内、代官樣へ差上る、出端の錢をもふけふと、挨拶そこ〳〵、立歸る、跡よ甚助只一人くゆらす、煙草のけふりより胸よ、思ひのたへ間なき、おこぶゝ後よもぢ〳〵うぢ〳〵、ぢりやまから ふと立上り歩みかゝれべこらへ兼、ア〳〵と呼かくれべ、甚助あたりを見廻して、心得ぬ、柳の小陰ア〳〵と呼かけるゝ、夜たかさんかいな、ゾイナあいなと走り出、はづかしそふに縋り付、いはんとすれど赤らむ顏、甚助ゝためつすがめつ、おこぶが姿を、眺め入り、見れば本肉の仕事盛り、身共よ取付きこだれるゝ、子細ぞあらん物語れ、ついよまみへぬげんさい殿と、いゝれて漸顏を上、つい、よ見ぬとゝ聞へませぬ、去年のさつきの夕まぐれ、道頓堀のなら茶やで、思ひ初たが縁のはし、丸猴の、ぼんやゝ丸清の二かい、千年も萬年も、かゝらぬ契り、鶴竹のふし〳〵、迄がなへる程、心よかつた床の海、音ゝぎし〳〵、岸本や人の噂よ、鳴戸やを、ほんよ嬉しの森新で、わしや悦んでゐる物を、夫よおまへゝあげ物やの荷箱か、大正の鰻の樣よ、ぬらくらとしたぬめた樣、忘れゐるとゝ、餘りな、間へぬわいなと取り付て恨の尺をくどき立て、ずし〳〵り上げたる有樣ゝ、達磨の畫像よのら、猫のそばへかゝりし如く也、甚助道理と脅撫さすり、一〳〵心よ、兎の合紋、顏見忘れたゝ、悪るかつた、幸ひおれも徒然の砌、ア水茶やへ、ア お茶やと、いゝれ

てゐてぶもぞつく〳〵、渡りよ船と帆柱を、かゝへて懸の港入、打つれ立て歩み行、流るゝ水の音さへも、物騒がしき戰國よ、行儀亂さぬ生立ち、武智が一子重次郎人目を忍ぶ深編笠松原傳ひよ歩み來て、有合床几よ腰打かけ、思ひ廻せば恐ろしき世の亂、きのふの君臣けふの怨敵、親ち子を討ち子ち親よ、刃を合す修羅の巷、せひもなき世の有樣と暫し思よ惱けり、漸心取直し、父光秀が刃よかゝり空しくならせ給ふたる、春長公の靈前へ、御許容なく共後世の爲拜せんとさしかゝる、道をさへぎる陣張甚助、家來引具し大音上、主殺しの武智が悴そこ動くなうぬが家來と僞し某こそ具柴方、久吉樣への奉公始腕を廻せとひしめけば、、、、久吉方へうら切りの二た股武士の甚助め、腕立して怪我まくるなと、股立取て身構へたり、ちよこざいな小わつぱめ物ないいせず討取と、いふ早く一同よ切てかゝりし刃の稻づま、暫し時をぞ移しける、いらつて切り込甚助が刃物からりと打落し、付入るさそく重次郎、切伏〳〵と、いめの刀、相人なければ是迄と衣紋つくろい刀を鞘納る不敵の重次郎、是ゟ直よばゝ樣の、御隱居所へ發足し、此身の出陣ゐ願ひ、敵のやつ原かけ立、なぎ立て寄手を惱ませ、骸ち修羅の巷よさらし、武士の本意を達せんと勇立たる若木の花、あたら盛りの春も見ず憂を、都の假住居跡よ、見なして

○同九日の段

德ち咎徹よ勝ち仁ち凶邪を除くとかや、されば具柴久吉中國の大敵を攻討んと水をもつて手をぬらさず忽ち和睦相調ひ、大物の浦よ着陣有り武名の程ぞ類ひなき、加藤正清進み出、信長と云鬼の再來と、おぢ恐れし春長公を討取つたる逆賊の武智光秀、一時も早く都よ實入り、ひねりし殺すが君へ追善、早御用意とせり立れば、久吉莞爾と打笑ひ、今よ始ぬ正

清が勇言く、心地よし〳〵、去りながら此久吉中國よ發向せば、都よ足を入れぬ内伏勢を以て討取らんと、武智が結構顯然たり、うかつよ上京なすときい過つて死地よ入らん、必油斷致すなと、軍慮よさとき久吉が詞よわつと諸軍勢、英智を感ずる斗也、折ふしひよか〳〵濱傳ひ、蘆ふで片手よ百性長兵衛、旅僧一人引連れて咄し交くり行過る、軍兵共い聲をかけ、〳〵土民蛸坊主、眞柴筑前守久吉樣の御前とも憚らずのさばりあるく横道者扣へおらふと咎められ、そんなら久吉樣いそこよござるか、お坊爰ぢやとやい〳〵嬉しや〳〵、ヤア一ぷくしませうと蘆ふでどつさり高あぐら、〳〵まだぞんざいなうじ虫めら、〳〵共樣よけん〳〵云んすな、久吉樣のお目よかゝつたら、さつぱり譯が分る物じや、ヤお坊成程左樣、大坂今里村の長兵衛、江州の觀音寺の僧獻穴が參りましたと、おつしやつて下さりませ、ヤア長兵衛でもけれん穴でも對面なさる用事いないきり〳〵立てと爭ふ軍卒、眞柴久吉御聲かけ、某よ對面せんといい子細ぞ有ん、是へ通せとは仰ッと恐れて兩人を君のは前よいざなへば、久吉二人を見下し給ひ、終よ見馴ぬ共方達、子細いかよと有りければ、〳〵、かも扨も物覺のわるいお人、わたしを見違へてござるかいの、〳〵いつやらの事で有た、今川とやら庭訓とやらいふ大將よ負さつしやつて春長樣、と二人連でこちの内へ逃げ込しやつたを、お世話ヤた今里の長兵衛でござりますいの、〳〵愚僧い前方江州の山寺觀音寺の住職致しおりました時、岸田村の百姓の息子岸田太吉といふ者を私が小性よして置きました時よあなたがお立寄り遊ばしまし、其小性よは茶を汲したらお目よとまり、奇麗な小性じやこちへおこせとおつしやる故、二言となしよ若衆を獻じた獻穴とヤ者、樣子有て只今い今里村よ侘住居、餘りおなつかしいやら又いお願ひの筋も有り、わざ〳〵是なる長兵衛殿と同

迫で参りしと、高座馴たるしら聲はり上げ、汗押拭ひ語りける、久吉い打うなづき、成程開ぺ一〻覺の有る事、兩人とも無事で重疊、我達が願ひの筋い、ヲヤ外でもござりませぬ、知ての通り本能寺で春長樣をころりと云した武智光秀、きのふからおらが在所へ陣を取先手の衆い京街道よ出張してお前樣を殺すとの謀事悪さも憎し、お馴染のお前樣、武智よ討すい殘念なと此お坊との噂し合、そこでおらが一生よない智恵を震ひ出し、お前樣をろつとおらが在所へ連て逃で、思ひがけなふ光秀めをころりと云してこまそふと、わざ〳〵迎ひよ來ましてごんす、〳〵一時も早ふ用意して武智を討取る魂膽さしやませ、ほんよまた忘た事が有るい〻久しぶりでお目よかゝつた土產い是と藁ふごかこて〳〵取出す瓜二つ、コレ是いおらがあけ地よ出來た眞瓜うり、切てあがつて下さりませと、自慢らしげよさし出せば、ヲヤ、明地よ出來しを切て喰とい幸先よし、

漏足〳〵、殊更汝が光秀を手引して討せんとい天晴忠臣出かした〳〵恩賞褒美い兩人共、望よ任せ得さすべしと仰よ悅ぶ兩人ゝゝ、勝色見する味方のどよみ、皆勢ひを添よける、かゝる折しもかたへよならぶいな村方、聞を作つて武智の軍卒、久吉やらぬと切てかゝれぺ加藤正清、ヲヤちよこ才なわぶ蠅共、目よ物見せんと大太刀拔て切りかくるを、受つ流して亂軍の、五よ鍔を削り合、濱手の方へ戰ひ行、兩人い立つ居つ、こりやゑらい大騷動怪家のない内久吉樣、〳〵ござれと先よ立、歩む兩人明智の久吉出行僧を引戻し、ぐつと一しめかたへよ投退け、百姓長兵衛とい僞り、誠は武智光秀の舊臣四王天田島、頭といまれやつと聲かけられ頭巾かなぐりぐつと詰かけ、追の久吉よく察した、うぬを僞りおびき寄せ討取んと計りしよ、見顯いされて殘念至極といふが早く藥づとよ、隱せし業物拔放し、久吉目がけ切付くれい、ヲヤ遁すなと軍兵共、群り寄て突かゝ

る、鏃の穂先いしの薄、なぎ立て〳〵切結ぶ勇猛不敵の四王天、乾達婆王の荒れたる如く突伏せ切伏せかけ上れば、あしらひ兼たる具柴方胴を失ふて見へよける、久吉も心を配り味方の勝利覬束なしと、有合ふ僧の袈裟衣手早よ取て我身よ着し、馬よひらりと飛乗て、濱手の方へ只一騎欠出す向ふへ四王天夫と見るかくり出す積先得たりとかわし一さん
よ駒を早めてかけり行、きたなし返せ猿冠者めと跡を、したふて、追て行、田畑あせ道嫌ひなく追かけ追詰四王天額よ無念の息煙立て勢ひ込でかけ廻る、遥よ夫と加藤正清踊上つて田島ノ頭、覩念せよと切込太刀、心得たりと渡り合、双方劣ぬ猛猛力火花を散して戦ひしが、いらつて打込正清が凡人ならぬ奇代の切先、あしらひ兼て四王天漂ふ所を切り伏せ〳〵、主人の安否氣遣ひと跡よ、見なして走り行、さしも勇氣の田島ノ頭、数ヶ所の深手よよろぼひ〳〵、殘念や、斯迄手よ入る具柴久吉討もらし、

夫のみならず〳〵と、名有る勇者の首をも取らず討死するが口惜やな、思ひ廻せど廻す程、運の強き猿冠者め、此土をはづれいつか又きやつを討取期や有ん、無念〳〵と云死よ、爰よ名のみを殘したる田島ノ頭が身の果の哀なりける

○同十日の段

なむ妙法蓮華経〳〵〳〵、法の聲も媚きし尼が崎の片邊り、誰住む家といふ顔も、おのが儘なる軒のつま、あたり近所の百姓共、茶碗片手よ、高咄し、なふ婆様、てな様も見た所が、上方で歴々の御衆そふなが、何の爲よ面白ふもない此在所へいでざつたぞいの、〳〵甚作そりやいやんな、京の町い武智といふ悪人が、春長様を殺して大騒動、大かた又下へ下つてゐやしやる久吉殿が戻つて來て、武智と是非よ一合戦なけりや濟ぬはいのふ、そんなら年寄いうか〳〵京の町よい居られぬとかくあぶな

げのないやうなてんな在所へ來てゐるが大でき〳〵、時ゝ近付がてら妙見講を勸るとゝよい手廻し、大きな馳走ゝ逢ました、是から隨分お互ゝお心安ふいたしませう、さア〳〵逝ふと口〻ゝ云たい事をたくしかけたやべり廻つて歸りける、老母ゝつと〳〵門送り庭の千草ゝ打水もたもつ葉毎ゝ、風薰る軒を目當てゝ、くる人ゝ武智が閨ゝ咲花の樣の前ゝ家來を遠ざけ、嫁の初菊伴ふて親ふ切戸の庭前ゝ花ゝ心を、養ふ老女、夫れと見る〻手をつかへ、後室樣の身舞として、只今參上いたせしと慇懃ゝ相述る、詞ゝ老女ゝ打ゑみ、珍らしい嫁女孫嫁はる〳〵の道ゝふこそ〳〵、去ながら悴光秀、當月二日本能寺ゝて主君を害せし無法者、同じ館ゝ膝ならぶるも、先祖の耻辱身の汚れと、館を捨て此在所へ見退きし此婆を、見舞とゝおこがましい、善ゝもせよ悪ゝもせよ、夫ゝ付が女の道、操の前ゝ武智十兵衛光秀が妻、そなたゝ又孫の重次郎光慶が嫁でないか、

生死分らぬ戰場へ、趣く夫を打捨て浮世を捨た姑ゝ、孝行盡すは道が逢ふ、妻城ゝ留つて、留主を守るが肝要ぞや、やもめ暮しの樂みゝ、夕顔棚の下涼、捨べき物ゝ弓矢ぞと、言放したる老女の一徹跡ゝ詞もなかりけり、常の氣質と、さからゝず、いか樣後室樣のおつしやる通り、此樣ゝ只お一人でさつたら、何もかも氣散じで、第一はお身の養生、今から私も初菊も後室樣のお傍ゝ居て、彼も焚たり茶も沸し、お宮仕をせうぞいのと、有合前垂襟の上ゝ引しめ茶釜の傍、端香の籠る姑のしぶ〳〵機嫌を取兼る娘心ゝ初菊も、どふ濟事か濁り非の、深き寄縁の釣瓶縄、水くみ上んと立寄れば、コレ〳〵嫁達、孫重次郎ゝ、城ゝ殘つて居召るかされべでざります、重次郎が願ひゝ、どふぞけふの軍ゝ高名手柄が願ゝしたいと、父上迄ゝ願ひしかど、婆樣のお赦しなきゝ出陣するも本意でなし、母ゝ取次してくれとくれ〳〵の願ひ故、餘り健氣さ祖母樣ゝ機嫌の程

いかゝぞと窺ひよ參りましたと語る內、老母ハ涙をはら〳〵と流し、うるさの嫁が物語り、主を討たる逆賊の邪非道の軍の評定、聞がいやさの此住居が又孫を攀るでハなけれ共、非道な悴光秀が子よ、重次郎といふ武士が、生れてくるとハ是も因緣悔んで返らず、戰場の事聞きたふないゝいや〳〵情なの浮世やと、無量の思ひ百八の數珠つまぐつて居たりける折ふし表へ草鞋がけ、風呂敷容よいつきせき蛙飛込道野邊の清水、結ばん夏の旅、西行もどきの僧一人門口よ立休らひ、諸國執行の一人旅、近頃申兼たれどハ宿の報謝よ預りたし、押付けながらと云入れる聲を老母が聞取て、見苦しうございますれど、お心置なふハ一宿、夫ハ千万忝い、左樣ならばハ遠慮なしよハ免〳〵と上り口腰打かくれば二人の女、草鞋の紐を解かくれば、勿體ない〳〵排ふて下さりますな、旅仕付けた坊主の氣散じ、木納屋の隅でもついてろり、蚊屋も蒲團も入ませぬ、お心

遣ひハ無用と、詞半へ表口、人目を忍び只一騎、窺ひ立聞武智光秀、心得がたき旅僧と、生垣押分けさし覗き、思ハず見合す母の顏、老母ハ何か心よ默き、わしとした事が心の付かぬ、コレハ出家樣、此板圍ひが則ち風呂場水ハ幸汲で有、ついぼや〳〵ともやして、暑い時分玄や行水して休んで下さりませ、婆も跡で相伴しませう、イヤ夫よハ及びませねど、相伴と有ば涌しませう、そんならハ免なされませと、包引さげ氣散じよ湯殿をさして入よける、味方の軍卒兩手をつき、ハ子息重次郎光慶樣後室樣よハ願ひの筋有と、只今是へハ越と、いふ間程なくしづ〳〵と、家來よ持せし鎧櫃、かき入させて打通り、〳〵者共そち達よ用事ハない陣所へ早くとふつ立やり、異儀を正して兩手をつき、母樣を以て、ハ願ひヤせし出陣、ハ開扉下されなば、武士の本意と、重次郎思ひ込でぞ願ひける、老母ハ見る〻機嫌顏、珍らしい重次郎、出陣の願ひとな悴を見限り此所へ身退き

しよ叮嚀な願ひの筋最前嫁女よくわしう聞きました、迚も出陣仕やるなら、祖母が願ひい此初菊、今宵此家で祝言の、盃仕てから門出仕や、何と嫁女嬉しいかと老の詞よ初菊い、飛立斗氣もいそ〳〵、心の悦び穂よ出る、顔は上氣の夏櫻色も姐く斗也只默然と重次郎、けふ初陣よ討死と覺悟極めし此體、お暇乞よ參りしと、しらせ給いぬ悲しやと涙呑込忍び泣操の前も立上り、祖母様のは機嫌のかはらぬ内よかための盃、それ、孫も大かた心せき、操は九献の用意仕や、重次郎が初陣の鎧の役へ、すぐよ花嫁、三國一の悲しみと、しらぬ白齒の孫嫁が、手を引連て、三人は奥の一間へ入よけり、殘る苔の花一つ、水上かねし風情よて思案、投首しはるし斗漸、涙押とゞめ母様にもばし〳〵様よも是今生の暇乞、此身の願ひ叶ふたれば、思ひ置事更よなし、十八年が其間は思い海山かへがたし、討死するい武士の習ひと思し召分けられて、先立不孝い赦してたべ、二つよい又

初菊殿、まだ祝言の盃をせぬが互の身の仕合せ、わしが事い思ひ切、他家へ縁付して下され、討死と聞ならばさてそ歎かん不便やと、孝と戀との思ひの海隔つ一間よ初菊が、立聞涙轉び出わつと斗よ、泣出せば、はつと驚き口よ手を當、こゝ〳〵聲が高い初菊殿、扨い様子を、ティ殘らず聞てかりました、夫の討死遊ばすを妻がしらいで何とせう、二世も三世も女夫ぞやと思ふてゐるよ情ない盃せぬが仕合せとい、餘り聞へぬ光慶様、祝言さへも濟ぬ内討死とい曲がない、わしや何ぼうでも殺しいせぬ、思ひ留つて給はれと縋り歎けば、こゝ〳〵こゝてなたも武士の娘じやないか、重次郎が討死い兼ての覺悟、ばゝ様よ泣顔見せ、もし悟られたら未來永〻縁切ぞや、ヱヽとかふ云ふ内時刻が延る、其鎧櫃爰へ〳〵、ティ〳〵早ふ、時延る程不覺の元、聞分けないと呵られて、いとしい夫が討死の、首途の物の具付るのがどふ急がる〳〵物ぞいのと、泣〳〵取出す緋威の、鎧の袖よふりかゝる、

雨か涙の母親ゝ、白木よ土器白髪のばゝ、長柄の銚子蝶花がた首途を祝ふのし昆布結ぶゝ、親と小手脚當、六具かたむる三〻九度、此世の縁やわり小ざね、猪首よ着なす鍬形の、あたりまへゆき出立ゝ、爽なりし、其骨柄、通武者ぶりいさましし、高名手柄を見る樣な、祝言と出陣をいつゝよの盃、さア〳〵早ふ、目出たい〳〵　嫁は察と、悦ぶ程猶爾增名殘、こんな殿はを持ながら是が別れの盃かと、悲しさ隱す笑ひ顏隨分お手柄高名して、せめて今宵ゝ凱陣をと、跡ゝ得いわずくいゝへる、胸ゝ八千代の玉椿ちりて、はかなき心根を、察しやつたる重次郎包む涙の忍びの緒しぼり、かねたる斗也、哀を、爰よ、吹送る、風が持くる攻太鼓、氣を取りなをしつゝ立上り、いづれもさらばと云捨て、思ひ切たる鎧の袖行方しらず成よけり、悲しやと泣入る初菊、母も探も顏見合せばゝ樣嫁女可愛やあつたら武士を、むざ〳〵殺しよやりました、初菊、重次郎が討死の出陣とゝ知ながら、なま中留て主殺しの憂死恥をさらそふか、健氣な討死させん爲、祝言よよそへて盃をさしたのゝ、暇乞やら二つよゝ心殘りのないやうと、思ひ餘つた三々九度、ばゝが心のせつなさを推量仕やと斗よて、始て明す老母の節義、聞初菊も母親も一度よどふと、伏まろび前後不覺よ泣き叫ぶ、襖押明け何氣なふつか〳〵出る、以前の旅僧、くかみ樣、風呂の湯がわきましたどなたぞおは入なされませと、いふよてなたゝ泣顏かくし、それゝは苦勞ながら年寄りよ新湯ゝ毒、跡ゝ若い女子共、お先へは出家から、いかさま湯の辞義ゝ水とやら、左樣ならばは遠慮なし、お先へ參ると立上れば、三人ゝ涙押包奥の佛間と湯殿口入や、月もる片庇、爰よかり取具柴垣、夕顏棚のこなたより、顯れ出たる武智光秀、必定久吉此内よ忍び居るこそ究竟一、只一討と氣ゝ張弓、心ゝやたけ數垣の見越の竹を引そぎ鎗小田の蛙の啼音をばといめて敵よ悟られじと、差足抜足、

親ひ寄、聞ゆる物音心得たりと突込手練の鎗先よ、わつと玉ぎる女の泣聲、合點行ずと引出す手負、眞柴よあらで眞實の、母のさつきが七轉八倒ナアこゝ母人が死なしたり、殘念至極と斗よて、道の武智も仰天し只忙然たる斗也、聲聞付けてかけ出る操初菊諸共走出、母樣か情ない、此有樣ゝ何事と縋り歎けば目を見開き、歎くまい〳〵、内大臣春長といふ、主君を害せし武智が一類、斯成り果るゝ理の當然、系圖正しき我家を逆賊非道の名を穢す、不孝者共悪人共、譬がたなき人非人、不義の富貴ゝ浮べる雲、主君を討て高名顔、天子將軍よ成た迚、野末の小家の非人よも、ふとりしとゝしらざるか、主よ背かず親よつかへ、仁義忠孝の道さへ立べ、もつそう飯の切米も、百万石よまさるぞや、儕か心只一つで、去るしは目前是を見よ、武士の命を斷刀も多いよ此樣な、引そぎ竹の猪突鎗、主を殺した天罰の報ひゝ親よも此通りと、鎗の穂先よ手をかけてゑぐりくるしむ氣丈の手負、妻ゝ涙よむせ返り、コレ見たまへ光秀殿、軍の首途よくれ〳〵もお諫めヤた其時よ、思ひ留つて給はらべ、斯した歎きゝ有まいよ、しらぬ事とゝ云ながら現在母ゝを手よかけて、殺すといふゝ何事ぞ、せめて母ゝのゝ最期よ善心よ立歸ると、たつた一言聞かしてたべ、拜むはいのと手を合しいさめつ泣つ一筋よ夫を思ふ恨泣、操の鏡くもりなき涙よ誠あらはせり、光秀は聲あらゝげ、ナアちよてさいな諫言立、無益の舌の根動かすな、意恨を重ぬる尾田春長、勿論三代相恩の主君でなく、我諫を用ひずして神社佛閣を破却し、悪逆日〻よ增長すれべ、武門のならひ天下の爲討取たるゝ我器量、武王ゝ殷の紂王を討、北條義時は帝を流し奉る、和漢俱よ無道の君をしいするゝ、民を安むる英傑の志女童の去る事ならず、すさりおらふと光秀が、一心變せぬ勇氣の眼色、取付島もなかりけり、折しも聞ゆる陣太鼓、耳をつらぬく金鼓の響きあゝやと見やる表口、

數ヶ所の手疵ゑ血は滝津瀬、刀を杖ゑよろぼひ〳〵、立歸つたる武智が一子、庭先ゑ大息つき、親人是ゑおはするやと、いふも苦しき斷末魔、見るゑ驚く母親より、娘は傍ゑ走り寄りのふいたれしや重次郎樣、ばゝ樣と、いひお前迄此有樣い情ない、ふ心慥ゑ持てたべやいの〳〵と取り付て、介抱如在泣斗、光秀わざと聲あらゝげ、不覺なり重次郎、子細い何と、樣子いいかゑ、具ゑ語れと呼われ、はつと心を取直し、親人の差圖ゑ任せ手勢すぐつて三千餘騎、濱手の方ゑ陣所をかため、今や歸國と相待所ゑ、敵いそれ共白涙の、櫓を押切て陸地ゑ漕付、追〳〵都へ馳登る、眞柴の軍勢ござんなれと、聞をつくつて味方の軍兵縱横無盡ゑなぎ立れ、不意を打れて敵い廢亡狼狽騒ぐを追立追詰爰をせんど〳〵戰ふ內、後の方ゑ大書上、眞柴筑前守久吉の家臣加藤正淸是ゑ有、逆賊武智が小わつぱ共目ゑ物見せてくれんすと、いふより早く太刀拔かざし、四角八面ゑ切り立

られ、瞬間ゑ味方の軍卒、殘らず討死仕り、無念ながらも只一騎立歸つて いゝと、息繼あへず物語れば、光秀怒りの髮逆立、言がひなき味方のやつ原、四王天田島、頭い、さんゝ四王天い、目ざすい久吉一人と、昨朝ゑの一騎がけ、亂軍なれば生死の程も、慥ゑそれと承いらず親人のゝ身の上心ゑかゝりゝ故、未練ゑも敵を切拔、是迄落延歸りしぞや、此所ゑゝ座有てい危ふし〳〵、一時も早く本國へ、引取給へ、早く〳〵と、深手を屈せず、親を、氣遣ふ孫の孝行心、聞ゑ老母はせき兼てこれを聞きや嫁女、其身の手疵は苦ゑもせず、極惡人の悴めを、大事ゑ思ふ孫が孝心、光秀、子い不便ゑないか、可愛とい思はぬかやい、併が心只一つで、いとし可愛の初孫を忠と義心ゑ健氣成、討死でもさす事か、逆賊不道の名を穢し、殺すは何の因果ぞとせぐりくるしき老の身の、聲聞付て重次郎、そんならばゝ樣ゑい、ゝ生害遊ばしたか、今生のお暇乞、今一度お顏が見たけれど、も

ふ目が見へぬ父上、母様初菊殿名殘惜やと手を取て、妹背の別れ愛着の道よ引るゝいぢらしさ、母は涙よ正体なく、討死するも武士のならひといへど情ない、十八年の春秋を刃の中よ人となるいつ樂しみの隙もなふ弓矢の道よ日をゆだね今朝の首途の其時よも母様けふの初陣よ遁高名手柄して、父上やばゝ様よ譽らるゝのが樂しみと、よつと笑ふた其顔がわしや幼よちら付いて得忘れぬとくどき立、くどき立つれば初菊も、ほんよ思へば此身程はかない者が世よ有ふか、とけてあふ夜のきぬ〳〵も永き名殘の云号二世を結ぶの枕さへかはす間もなふ此様な悲しい別れをする事いどふした罪か情ない、わたしも一所よ殺してたべ死たいわいなと身をもだへ、互よ手を取りかはし名殘涙の暇乞、見るよ目もくれ心きへ母も若母も聲を上わつと斗よ取亂せば、遁勇氣の光秀も親の慈悲心子故の闇、輪廻の紐よしめ付けられてたへ兼てはら

〳〵雨が涙の沙境涙立ち騒ぐ如くなり、又も聞ゆる人馬の物音、矢叫びの聲喧く手よ取、如く聞ゆれば、光秀聞よりつゝ立上り、物音ゝ敵か味方か、勝利いかよと庭先のすね木の松が枝踏しめ〳〵よぢ登り、眼下の村手を屹度見下し、和田の御崎の弓手より退〻つゝく數多の兵船、間近く立たる魚鱗の備へ、千生瓢の馬印ゝ、疑もなき其柴久吉、風をくらつて此家を逃延、手勢引ぐし光秀を討取術と覺へたりと、いふより早くひらりと飛下り、草履掴みの猿面冠者、いで一ひしぎと身繕ひ、勢ひ込でかけ出せば、武智光秀暫く待、其柴筑前守久吉對面せんと呼ゝつて、三衣よかゝる陣羽織、小手脚當も優美の骨柄ゆうせんとして立出れば、光秀見るより仰天し、かけ戻つてはつたとよらみ、珍らしゑ其柴久吉、武智十兵衛光秀が、此世の引導渡してくれん、觀念せよと、詰寄る光秀、中を隔つる老烏の、子故よ手疵屈せぬ老女、なふ久吉様、我子よかゝる此母も、

天命遁れぬ引そぎ鎗、作りし罪の万分一亡ぶる事も有ふかと、思ひ餘つた此最期、武智が母い逆磔よ、かゝつて無慚の死を遂しと、末世の記錄よ殘してたべ、それもやつぱり悴めが、可愛さ故の罪亡し、うるさの婆婆よ殘らんより、孫といつしよよ死出三途、ハテわたしもお供致しまする、いづれもさらば、おさらばと、赤練殘さぬ武士の、花も實も有る此世の別れ、今ぞはかなく成よけり、操の前も初菊もさらよ詞も出べこそ、あへ亡骸を押聊かし天よ、あこがれ地よ伏て歎く、心ぞいぢらしき、哀を餘所よ具柴久吉、光秀よ打向ひ俱よ天を戴かぬ亡君の吊ひ軍、今此所で討取てい義有て勇を失ふ道理、諸國の武士よ久吉が軍功をしらさん爲、時日を移さず山崎よて、勝負の雌雄を決すべしかいか、よ〳〵、道の久吉よくいふたり、我も惟任將軍と勅許を請し身の本懷、一先都よ立歸り京洛中の者共へ、地子を赦すも母への追善亙の運い天王山洞が峠よ陣所を搆へ、只一

戰よかけ崩さん、首を洗つて觀念せよ、ホヽヽ、何さ〳〵、たとへ項羽が勇有共我又孫呉が秘術をふるひ、千變萬化よかけ惱まし、勝閧上るい瞬く内と久吉が詞いゆるがぬ大磐石忽廻り小栗栖の、土よ哀を殘すといしらずしられぬ敵味方、よらみ別るゝ二人の勇者、二世をかための別れの涙かゝれとてしるうべ玉の、其黒髪をあへなくも、切拂ふたる尼が崎ぼだいの種と夕顔の軒よきらめく千生瓢箪、駒の嘶迎ひの軍卒見渡す、沖い中國より追々入來る數万の兵船、威風りん〳〵りんせんたる、具柴が武名假名書よ、うつす繪本の太功記と末の、世までも殘しけり

○同十一日の段

家來共やい、彌明日い山崎よて、噴軍、時よ拔目ないい久吉殿、敵方の間者又怪しき曲者も有んかと、此赤山與三兵衛へ密々の申付け、汝らもぬかりなく、若や怪しき者も有らば、男女よ限らずからめ取つて本陣へさし

出せよ、褒美ハ急度後日よりは沙汰、必ずぬかるな合點かと、示し合せて主従ハ、左右へこそハ別れ行、身ハ世を忍ぶ、幾笠よやつす姿も棚が、夫の詞守り立てし、主君の種の音春丸、いたハり傳き參らせて心ならずも夜の道、流れよ、傳ふ淀堤、並木のかげよ、立ち休らひ、和子遥の西よ旗の手の、月よ映じてきらめくハ、山崎の御本陣、父上の御座所、わらハが夫政道殿も主君の御供、翌ハ早々光秀様よりは對面、お嬉しうでざりますかへ、嬉しい〳〵、早ふおとゝ様よ逢いたいけれど、どふやらねむたい〳〵と、詞の内よ、ふら〳〵眠り、道理でござります、太切の密事を受けた俄の旅立、若や敵の間者よ出合、ほ身の御難義有りもやせんと、心ハ千〻よ誰有ふ、江州丹州兩國のほ主、今でハ四海のほ大將惟任將軍のほ公達、あまたの從者引かへて從ふ者ハ此柵、杖柱とも思し召、ほ心根がおいとはしい、是といふのも父上の道よ背きしほ企、たとへ望みハ叶ふても、勿体ない

ほ主君の春長様よ刃を合ハし、主殺しの大罪と、世の口の端よ情ない、夫よ連れたる我夫も、俱よ汚名を下すかと、思へば悲しい〳〵と人目なければ聲上げて、わつと斗よ伏沈む心ぞ、思ひやられたり立戻りたる赤山が夫と見方相圖の呼子、友呼千鳥はら〳〵と、顯ハれ出し以前の紐子、女めやらぬと追取卷く驚きながら道の柵、音春を圍ふてすつくと立ち、心得ぬ人〻の舉動、何者成るぞと咎むれば、赤山ハ大口明き何者とハ舌長し、主殺しの光秀が一子音春丸、軍の幸先久吉公へ差出す、早く渡せとの〻しつたり、〻〻事おかしや、光秀公のお内よて、人も知つたる松田太郎左衛門が女房柵、主なしの久吉殿、夫れよ隨ふそち達が、反ばぬ事を言はせも立てず、者共と赤山が下知よ從ひ一度よ切てかゝるを事ともせず、右と左りよなぎ立つれば、口程よもなき雑人原むら〳〵ぱつと逃散つたり、透を窺ひ後ろより、切込む赤山早足の柵、ひらりとかハせ

ど赤山が首は前よゞ落よけり、〳〵此隙よ音壽樣、此場を早ふと、かい〳〵敷く忠義一途の女氣よ、主君の若を伴ひて、定めなく〳〵短夜よ心せかれて、たどり行

○同十二日のだん

誰を乞、鳴や梢よ、から衣はつてふ蟬の音を友と、世をいとふたる浜人の風雅を好む一かまへ、谷の流れも水無月の空半なる夕暮時遠寺の鐘のかう〳〵と、乘ての願ひ有り磯海、深き思ひよ棚が緑よよるべの身の住家そこ爰とたどり〳〵る〳〵長暇稚子連て夜の道、漸尋ねあたりよも、家居なけれゝ爰ならんと柴の軒端よイみて、のふ音壽樣、夫松田太郎左衛門殿の差圖を請て來事は來ても、つゐよ是迄音信もせぬ親ぼの所、どふやら敷居が高ふなり、閃よくう思ひますと、いへゞ音壽が打默頭、そなたが得閃らずゞおれから先へ閃つてやらふと、何のぐわんせも上り口、

マコヤしを、玄はよして、閃る物音何やらんと、納戸を出る妻の具弓、顔見合して柵が手をもぢ〳〵と、ホヽヽはんよ私とした事が、いかよ身君の所ぢや迎案内なしよ不作法千万、ふ敷なされて下さりませと、いへどたゝたゝ不審顔、夜よ入て若い女中の子供をつれ、身の所へ來たとゝ、此母ゝ覺へゝどざらぬ、成程〳〵委細の譯をヤさねゞそう思し召も理りながら、私事ゝ十三の時家出致されまし た、ぼ子息宗太郎殿の女房柵とヤ者夫も今ゝれつきとした侍名も改て松田太郎左衛門とヤまして夫れゝ〳〵適の武士どふゞ是迄の事ゝ川へ流し、元の親子よ、そりや云しやれいでも知れた事、元より氣よ違ふて家出したと云ふでもなし、生れ付て力强、草深い住居を嫌ひ、我と我手よ家出した宗太郎、わしゝ明暮こがれて居ます、そして迎てわせたゝ夫婦の中よ出來た子か、〳〵こちへと嬉しさの子よゝ目のない母親が、悦ぶ中へ宗左衛門、刀片手よわゆみ山

お祖母何をべり〳〵おいやるぞ親を見捨た不孝の躰夫よ連添ふ此女郎嫁なんぞとゝ穢らゝしい、早立ち歸れとつかふどよ、いふをおさへて、こゝ夫ゝ一途な思ひやう、毎日〳〵壁訴訟、願ひの折も幸と、初めて逢た嫁の手前、どふぞ了簡し中直りして下されと、いふも涙の種ならん、こゝ、又云ても〳〵役よ立ぬ悴が訴訟聞きたくないぞ、よい年をして女房去るも世間の笑ひ、暇の代りぢや向後物い言んずく、早く奥へお行きやれと、常の氣質のぢやかぞよゝ、詞ゝなくて去ほ〳〵と、心殘して立て入櫛ゝ氣の毒の中よ願ひも言ひ兼て、俄よ作る輕薄笑ひ、こゝ、ほんよまあよしない事からは夫婦のおいさかい、もふお腹立ゝ重〻のは尤じやがどふぞ夫の願ひ、則此子ゝ主人と仰ぐ光秀公のは公達音壽丸様、夫よ付ての儘訴訟と何か様子ゝ白紙よ、書き認めし願ひの一書、眞の前よさし置けば遺骨肉同胞の我子の手跡と云ふ〳〵ながら、手よ取り上げて押開け

ば、様子いかゞと氣遣ふ嫁、眞ゝ猶も眉をひそめつゝ〳〵讀も口の中、巻納めてよつと笑ひ、何事ならんと思ひしよ、少し計りゝ待くさい所も有り出かす〳〵、そんなら夫のお願ひとやまずゝ、成程太切の密事、其方ゝ云るまい〳〵、悴が我への願ひといふゝゝ此小兒、光秀此度當山崎よお、ゐて、合戰のいとむといへ共無名の軍、元より主殺しといふ大罪、天何ぞ是を赦さん然らば十が九つ負軍と押はかつたる悴太郎、去るよよつて、光秀が一子音壽丸我よ養育を賴み、成長の後ゝ出家ともなしくれよと の願ひ書又柵事ゝ敵がた森尾茂助が妹よゝへば是も親が手ゟ返し遣はしくれよと有悴が文面と開て惚り柵ゝ膝摺寄て、ムヽ、スリヤ主君の若殿お預けヤさん其爲よお詫の使ひ一つにゝわたしが身の上兄様へ返してくれとゝ何の事、そふいふ事とゝ露去らず眞ゝ様へお詫して、嫁よどふせい新せいのお詞受て歸りなば、夫の悦び此身の手柄と悦んでゐる物

を科もない身を去らふとい聞へぬ夫の心やと、くどき歎くぞ道理也、扨何も歎くよや及ばぬ此宗左衛門も元い武士、亂れたる世を遁れ、心を澄す茶道の樂しみ、折〻い久吉殿の招きよ預り咄しの伽、弓も引きかた具柴へ心通はす某、大恐無道の光秀が種と有ば願ふてもないよき得物、首打放し久吉公へ献ずるならば嘸悦び、飛で火よ入夏の虫とい是ならんと、鼻の一言柵が聞とり又も二度恟り、はんよ〳〵親子とて餘りな情ゑらず獵人さへ懐へ入る鳥い助ける物たとへ此身い去られても、夫よ立る心の潔白女でこそ有松田が女房、主人の若殿めつたよふ首い得渡さぬ、斯いふ内よ片時も置きます事い成りませぬ、ア若殿様、いざ〻せ給へと立寄るを、突退け〳〵音蔦丸小脇よ引抱きはつたとよらみ、ア龍の腮よかゝりし小悴、連歸らんとい叶いぬ事、わるく妨げひろぐやいなや、身の爲よならぬがやゝ、元ゝ夫よ去られし此身、生て詮なき我命、ちつ

共厭いぬ〳〵と、又立かゝるをよゝ面倒なとえんの當うんと倒るゝ共隙よ奥の間さしてかけ入つたり、跡よい一人柵が苦痛こたへてかき直りさふとい、心い鬼か蛇かいのふ、たとへ此身いひし〳〵ほよ成る迚も、取かへさいで置べきかと、心を配る樣先よ、落ちる一書い夫の、手跡、柵殿へ光高ゝ最前のみの中よ封じ込たる此一書心ならずと封押切、書殘すよもせよと又取上げ〳〵今度の合戦主君光秀公主殺しといふ悪名、其罪逃るゝ事有るまじく覺へい故其方を頼み親人へ若殿の義くれ〳〵相頼む事よい、又〻明朝の戰ひよ向ひい敵いそちが兄森尾茂助春久よいよし、元より討死の覺悟よいへば、我等が首は春久へ遣いしい、なれ共妹の縁よつれ、用捨もいい〻武門の中耻べき事よいへば是非なく暇遣

いしい段、必ず恨有るまじくしと、諾もかいらず立上り、こりや斯して居られぬわいのふ、夫の最期い此曉、若殿のは身の上奥へ踏込取返さふかく〳〵、あれ〳〵あの鐘い八つの鐘、天王山へい一里の餘、夫の命も助けたしこりやアどふせう〳〵、と主と夫の身の上を我身一人よ柵か立たり居たり詮方も、涙ながらよ氣を取直し、何よもせよ是より直よ天王山へかけ付けて夫よ一言そふじやく〳〵と、帶引しめ、常よい弱き女氣も夫よ立る貞心の、くもらぬ鏡てる月よ、照す道筋一さんよてけつまろびつ、「えたひ行山い血汐のから紅ひ、敵も味方も入亂れ、戰ひいどむ其中に、恋尾松田が雌雄の爭ひ、人ませもせずはつし〳〵、切結びたる電光の、刃の光り飛鳥のごとく鎬を削る其折しも、夫の生死いかゞぞと、氣いはり弓の女房柵武家の育のかい〳〵敷、夫を思ふ一心よ、木の根岩角厭ひなく登る、嶮岨も力草、足踏しめて難なくも、こなたの岡よよぢ登り夫と見る

お分け入て、アア〳〵待ても身を惜まず、さゝゆる女房突きのけて、猶も付け入る太郎左衛門、互いよ劣らぬ勇將猛將中ようろ〳〵詮方も、なぎさの小舟柵が、涙よ漂ふ其風情、心も功よ有合楯、切結びたる白刃の、ちつ、ちつかとどいめ、アア〳〵待て下さんせ、コレ兄様茂介殿必ず早まつて下さんすな元より知た敵味方、討ちうたるゝい武士の身の、常とい知て居ますれど相手も多いよ姫同士、切つはつゝの爭ひを、何と見捨てゝ置れふぞ、思ひとまつて〳〵と、歎きかこつを耳よもかけず、アア義晴何を猶豫、内證の緣い緣親子兄弟敵ゝと、鎬を削るい武門の常、早く勝負を決せよと、云せも果ずよつと笑ひ、死人同前の政道我相手よい不足なり、光秀が先途を見屈け死る共遲かるまじ、妹がとむるを幸、此場を早く退けと開よりくいつとせき立、アア奇怪なる一言、弓矢取てい誰よ恥べき事や有らん、女房が兄とい云さぬ、首討取て修羅の奴となしくれんよ、死人同前とい案外な

りと居尺高いかやうに陳するとも死色を顕はす汝か骨格、我に討れん心の覚悟、死人と云しか誤りかと、明察違はぬ一言は、胸に磐石現とも、心はやみの柵が、聲も涙に かきくもり、兄様のあの心ならどの様に、思はやんしても、所詮死れぬ前の命、とふぞ死なずに濟む事なら、千年も萬年も長生して、二人の中の、サテ二人が中に預かつた、主人のお種音毒様の、行末もは無事な様に思案して下さりませコヤ、夫婦と成て以來に願ひといふは是一つ聞届けてたべ我夫と、妹か歎き迫るも血脈の糸の亂れ口、涙呑込む義晴が心の内ぞせつなけれ何思ひ、けん太郎左衛門、鎧ぬぎ捨どつかと座し、實や名將の下に弱兵なしと、適眼力森尾義晴、主家の無道を見限りて、死出三途の先陣と覚悟極めし心は鉄石死後に頼むは此女、又是迄音信せざれ共、實父松田利休殿へ、預置たる彼若殿心を添てよき様に、頼み置は貴殿一人、最早浮世に望なし急ぎ首討我存心、立さしくるしも武士の情猶豫は返つて恨むぞと、言より早く持たる刀腹にがばと突立れば、のふ悲しやと取縋り、歎く女房を取て引すへサテ森尾、名も なき士卒の手にかけんより、武士の情に我首を、受取くれよとさし付れば、こは世の有様とは言ながら、かばかり惜き弓取も、主家の悪事は其身の不幸、残念至極と義晴が、是非も涙に立迫れば、サテ愚く、死るのぞむは勇者の本義、骸は廣野にさらす共、名は千歳にとゞまるこそ、死しての悦び此上なし早く、〳〵と唱名の、聲は此世の別れかと、身をもむ妻を勸かさず、腰に引敷強氣の手負、義晴いざと潔き、勇者の最期あへなくも首は前にぞ落ぬけりわつと計りに柵は、共儘死がいはいだき付聲も惜まず泣叫ぶ、心を察し諸袖をしぼるも血脈恩愛の涙にかはりなかりける、義晴は涙を拂ひ、サテ〳〵妹歎ひて返らぬ松田が最期、遺言守るは音毒が身の上又此首はそは持帰り、佛事もよきにと詞の中、麓の方に あい〳〵聲、ひゞ

きなびける兩陣の、入亂れたる閧の聲身よぞたゆる柵が涙ながらよ
亡夫の、去るしの筐上帶よ、包むも涙雨やさめ、ふり行末の末迄も、思ひつ
〻けし敵味方、兄の忠臣妹が、貞心くもり泣〻も麓の、方へ「たどり行、短夜
の、風吹拂ふ庭の面隈なき月も哀そへ、涙の露かいたいけよ、無漸なるか
や稚子の、目ハ泣はらし、袖摺の、其松が枝よ、からまるゝ、妻の眞弓ハさし
寄て、利休殿尤武智、光秀といふ逆賊の子とハ云ながら、我子の爲よハ
お主の若殿、手よかけふとは胴欲な、どふぞお命助ける樣、思案仕かへて
下さりませといへ共、更よこたへなく、おのが好める薄茶の手前、稚子ハ
座をしめて、おりや侍の子ぞやよつて何ともない、早ふ殺して下され
と、云放したる健氣さを、聞よ眞弓ハたへ兼て、道ハ武士の育がら、開分
けよい程なを不便な、いぢらしうハござらぬか敵と味方と分登る道
ハ二つよかれ共、同じ雲井よ、照月の分隔なき恩愛と、情の道を辨へて

どうぞ命を助るやう、思案してたべ我夫と、詞を盡し理をせめて涙なが
らよ泣詫る山手ハ修羅の責皷時しも遙よ彌して、松田太郎左衛門政道
を森尾義時討取たりと、聞ふ思ハずすつくと立、悴宗太郎ハ早討死を
遂しとか此上ハ生け置て詮なき音壽、此世の暇取せんと、はどくいまし
め悅んで手そゝぶりする有樣を、見るよ心ハ弱れ共、四海の怨敵根を斷
て枯す枝葉と拔放すのもいたハしやと、さゝゆる眞弓寄るを寄せじと
引戻し爭ふ折も柵が、脅よ夫の切首を結ぶ妹脅の別れ道歷もあらハよ
かけ戻り、此体見るふ稚子を後よ圍ひ、待てと、言せも立てず聲荒らげ、
此期よ及び聞く事ない、悴討死せし上ハ天王山を取切られ、光秀が敗
軍も目下妨げせずとそこ退けと、尖き刀振りかざす、其手よ取付き聲震
ハし、親父殿慈悲も情も辨へながら初て逢た嫁の思ハく、生としいけ
る身でハなし先立若木若木の苔どふぞ助けて進せてと涙よ誠姑が情

の詞身よあまり有がた涙柵が、夫の首を抱き上げ、なき我夫も諸共よ命のお詫とさし付られ、道剛氣の利休も親子の輪廻よ引されて、たるむ心を取直し、宏り〳〵と付廻す、地獄の阿嗔三悪道、面倒なと突退蹴退、ヤイと一聲稚首水もたまらず打落せば二人いわつと泣倒れ正体もなく伏沈む主殺しの大罪報ひも早き此死ざまいで久吉の本陣へと、かけ出す袴をとゞむる嫁はつたと蹴飛しかけ行向ふへあまたの軍卒高挑灯よ威風をてらし、宏づ〳〵入り來る具柴久吉、あたり輝く陣裝束、思ひ寄らねば宗左衛門遙しさつて平伏し、コハ存じ寄らざる公のお入來、只今陣所へ推參の所願ふてもなき對顔と、敵ひ深く相述れば、久吉莞爾と打笑て、逆賊光秀が一子音壽丸、足下扶助致さる由、家臣森尾が密事の注進、急き討手とやも、餘り仰々敷、久吉密よ向ふたり、いかよ〳〵と嚴然たる、詞よ猶も恐れ入、〻計らず手よ入る武智が紛、討取たるい某が信義を忘れぬ兼ての交り、イヤ〻改下さるべしと、血汐を清めさし出せば、久吉とつくと實檢有り、父光秀も此如く、やがて討取主君の怨敵、とは云ふ物の稚き者、不便の最期遂たるよな、イヤナコ宗左衛門云ば小兒の此切首、梟木よさらすよも及ぶまじ、由縁の方へ葬り召され、お邊への恩賞は、風雅を好める別業へ、思ひ寄つたる寸志の一品、それ〳〵者共早是へと、仰の下よ雑兵共、庭よとうさり一つの居石、何と宗左見られしか、亡君春長公のお自服とも思されて、お請有らば拙者が悦び、其石を某へ、いかよも小袖かはりの小袖石、菖蒲よも、あらぬ眞孤を引かけし、かりの淀の〻、忘られぬかなゝ、さらば〳〵と一禮し、從者引連れ久吉い本陣さして歸らるゝ、跡見送つて宗左衛門はつと吐息も突詰し女心の柵は何思ひけん表の方、穴出す戸口立て切利休さ待て女音壽丸が身代りよ二人が中の紛を殺し、夫が最期の忠義も立、嘸本望で有ふなと、聞て悔り、そんなら此子を初

から、あなたの孫といふ事を、十六年が其間、對面せざる我躰、たとへ幾年經る迚も、骨肉分けし此親が、見忘れてよい物か、音聲丸よ出立せ、連來りし稚子の、面ざし目元鼻筋迄、悴よ其儘生寫し、其時孫とは、知たるぞや、とい言ながら、現在の祖父が手よかけ一刀の、下よ消行不便さを、こらゆる心の四苦八苦、推量せよと大聲上げ、取亂したる滔涙、ねふれるごとき死首を、右と左りよ打守り、悴、久〻よてよく來たな、十六年が夢の内、忠孝全き親子が最期、出かしおつたと一言が、夫子の爲の經陀羅尼と、有がた涙棚が、袖よ露置くかこち言、そうしたあなたのお心とえらで恨みし不孝の罪、お赦しなされて下さりませ、〻、其詫言は此母が、言ねばならぬ此場の時宜、孫と我子の死るのを、夫と白髮の身の因果、むごい者ぞやとさげしんで、たもるなやいのと姑が、詫るも涙聞く涙、〻、勿体ない事おつしやつて下さりますな、嫁と名計是迄よお宮仕へもする事か、逆樣事を見せまする、不孝の罪が恐ろしい、といいふ物のあぢきない、二世と契りし我夫の、最期の場所よ居ながらもとめる事さへ情ない、いとし可愛の千石迄人も多いよ祖父樣の、お手よかけふと親の身で連て來事い何事ぞと、歎けど、迚利休も、恩愛死別のうき涙二つの首を見つ見せつ、取り亂したる三人が、涙の雨よ水かさのいとゞ增りて淀川の堤も、崩るゝごとくなり、利休漸涙をおさへ、悴が忠義を立てさせんと信義を失ふ我計ひ、天地を見拔く久吉殺、賜も有べきよ、小袖よかへて遣いすと心得ぬ庭の居石、其上猶も不審なるい、金葉集よ乘せられし相撲が詠歌、富浦よも、あらぬ眞孤を引かけしと、引きぞ煩ふ賴政が深意を取れば千石が、最期を花よよそへし謎、躰が子袖千石と、心を込めし我への賜、今こそ思ひ當つたりと悟るも、迚久吉の、名智を感ずる計なり、柵は膝すり寄、悴身がいりといふ事を、そんなら孫の千石が、身代りよ立たのも、水の泡よなり

ますかいのふ、愚〳〵、敵を恵む寛仁大度、猶も願ひを立んと思ひ〻、此利休が皺腹一つ、必す留なと指添を、既ゝ拔んとする所、取付き歎きとゝむる二人、放せ〳〵と爭ひの折もこそ有れ一間ゟ松田宗左衛門利休殿、狼狽ての犬死なるか早まられなと聲をかけ、障子をさつと真柴久吉左づ〳〵と立出れは、思ひ寄らねど騷がぬ利休、犬死とい事おかしや、誠真の失せし某が既ゝ報ふ此切腹、遠い老体斯も有んと察せし故、陣所へ歸る体ゝ見せ、とくゟ忍び窺ひ開く、西國の探題たる真柴久吉、實檢遂し光秀が一子、天地廣しといへ共今一人と有るべきか主君を弑せし武智光秀、夫ゝ引かへ子息政道、討死、遂しは、適勇者、せめてい死したる人〻の菩提の爲めゝ此所へ、庵を結び利休殿、好める道の茶を以て、往來の人ゝ施さゞ、死ぬるゝ增さる節義ならんと情の一句は則悟道、死をとゞまりて松田利休〳〵恵も厚き御仰、敬への心は則菩提心の濁り墨染の衣がいりい、此居士衣、くもりを拂ふ鬱ひぞと髻ふつ〻と押し切て姿心もかいる世ゝ我い茶道の道廣く、孫が其名の一字を取、利休を其儘ゝ千の利休と改名し、浮世の塵ゝ交いる共只本覺の佛性たらん、ゝゝ、天性備いる千の利休、今ゟい久吉が則ち茶道の師と頼まんと、約束堅き小袖石、庭ゝ哀い稚子の涙の種か袖すり松古跡となりて末の代ゝ殘る其名の因縁い、此時よりとしられたり、かゝる折しも真柴の郎等、庭上ゝ大息つき、ゝ注進と呼いれゞ、堀本義太夫、味方の勝利い何と〳〵、ゝ仰の如く備を立、兩陣互ゝ鐔を削り、爰、をせんと〻取ふ中、敵の勇將蟹江才藏、陣頭ゝ踊り出、味方の諸軍を手玉の如く打付け、投付け欠廻る、其勢ひゝかぢ恐れ、少したゆみて見へたる所ゝ、福嶋の陣中ゟ、至て小兵の桂市兵衛、斯と見るゟ飛かゝり、互ゝ組合金剛力者、六尺ゆたかの才藏を難なく生捕古今の手柄、勝色見する間もなく、川を隔し筒井順慶、時分いよしと光

秀が陣所を目がけて無二無三、一手よ成て責かくれば、敵ハ廢忙狼狽騷き、崩れ立たる其虚よ乘て、追立はつ詰責付れば、是迄也と光秀も馬を飛して只一騎、小栗栖さして落延しを追ゝかけ行味方の勝利、ハ歸陣有て然るべしと、悅び勇み訴ふれば、潔し〳〵、小栗栖へ後詰せん、旁用意と久吉の、詞よはつと迎ひの軍兵いざハ歸陣と引居る、駒よゆらりと法の繰、結ぶ一世と二世の繰、切て捨たる亡魂の、去るしを直よ野邊送り、又思ひ出す、女氣よ涙の袖や鎧の袖、旭よ映じきら〳〵、綺羅一天よ刈取る具柴、仁德なりや風雅の德、忠孝全き其德を世ゝよ傳へて、美嘆せり

○同十三日の段

神力勇者よ勝ずといへ共、天逐よ是を罰す、されば武智十兵衛光秀、筒井順慶裏切よよつて山崎の一戰敗れ、漸〳〵遁れ小栗栖の藪陰近くさしかゝれば、追ゝ欠くる具柴方、落人よ遁すなとおめき叫んで切かゝれば、

ちよこおなうず出共、冥途の導きしてくれんと、振かざしたる刀の稻妻瞬く内よ先手の軍兵、十二三騎切て落せし勇猛力、叶はぬ敷せと一同よ、嵐よさそふ端武者共、むら〳〵ぱつと逃失たり、相人なければ光秀ハ太刀のいきりをさまさんと、藪の小かげよ手綱をひかへ、傾く運の口惜涙、鎧の袖よはら〳〵、降かゝりたる夕立の空も哀や添ぬらん折ふし藪のこなたゑ、たゆみ行む光秀が鎧の透間を見極めて、ぐつと突込猪突鎗驚きながら切拂ふ、間もなく突出す竹鎗の穂先ハ風の去の薄、なぎ立突立切拂ひ暫し時をだうつしける、稍よすだく蟬の經、手向となりし武智光秀、小手定まらぬ竹鎗を、身の毛のごとく刺通され、流るゝ血汐よ夏草を花と染なす紅ひの、田畑あせ道刀を杖、よろぼひよろぼふ無慚の有樣、はつと一息撞出す鐘寂滅爲樂貴太鼓修羅の迎ひの百姓共、集り寄たる一むら雀、又突かゝる上段下段、一世の瀨戸と受流し、爰をせんどゝ切ふ

せぐ、手練の鋒先百姓共、叫はぬ赦せと我先よ跡をも見ずして逃散たり、遁さじ物とかけ出し、心は矢猛どはやれ共身体勞れとつかと座し、拳貫く無念の齒がみ弱る心を取直し、一元よ歸す此世の暇、刀逆手よ我腹へがバと突立引廻す、程なく來たる貝柴久吉、万里よ羽うつ大鵬の威勢い旭の登るが如く、偃〻然と歩み寄、いかよ光秀主を討たる天罰の報を思知たるかと、太刀拔放し光秀が首をはつしと打落し諸軍よ向ひ聲高く、聞ケく者共、此虚よ乘て敵の殘黨左馬助光俊、齋藤内藏助が備へを暫時よ攻崩し、名よ近江路の湖へ一騎も殘らず追沈めん旁來れと先よ立、勇〻進んで凱歌の聲、旗をたゝき凱陣の共悦びを今爰よ、うつすも勸善懲惡の端ともなれとまさな言書き納めたる君が代の方〻歳の齡きは中〻やもかろかなれ

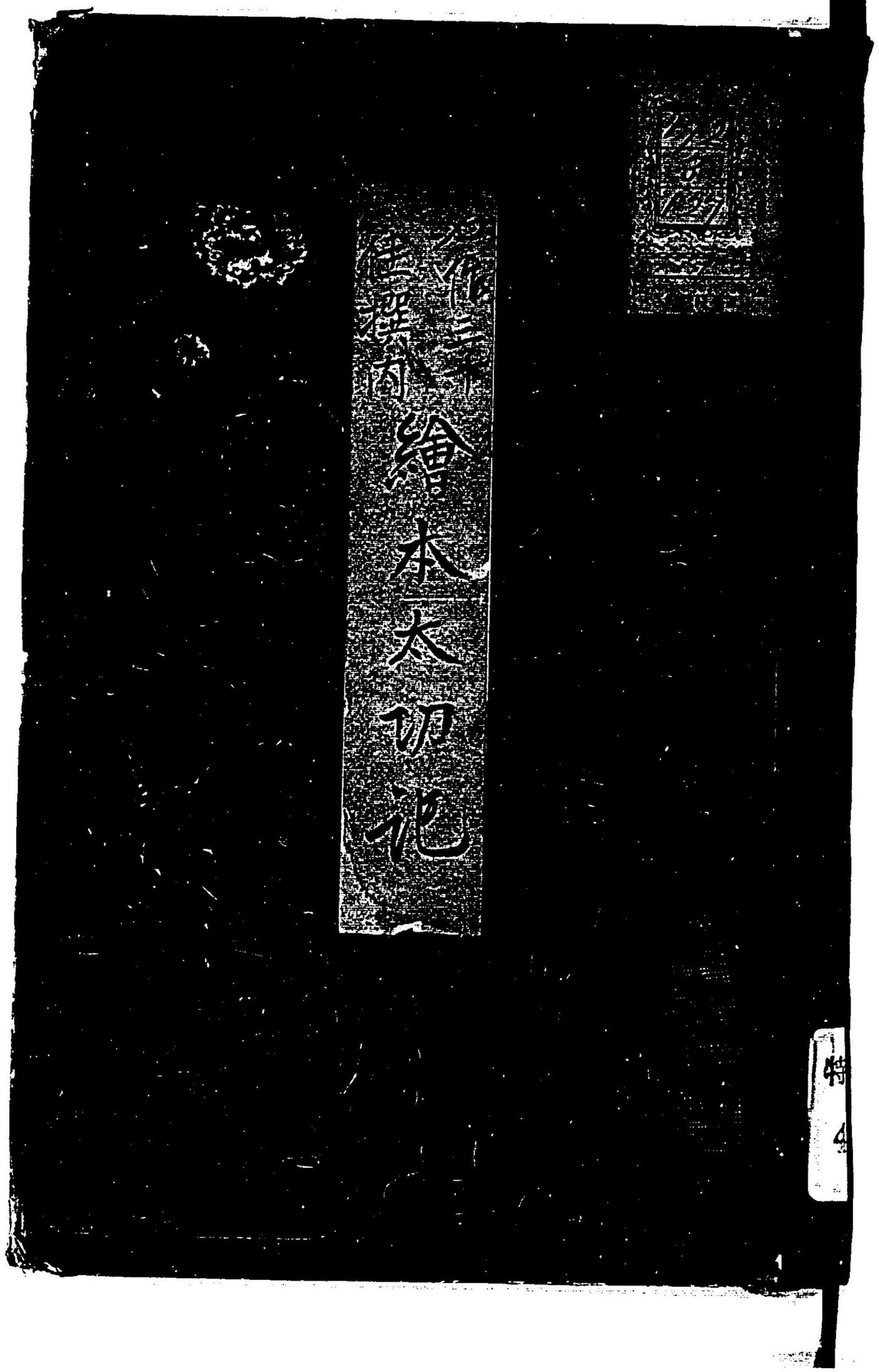
寛政十一年未七月十二日作

明治廿三年十二月廿二日印刷
明治廿三年十二月廿四日出版

編輯兼發行者　日本橋區通四丁目四番地　内藤加我

印刷者　日本橋區浜和泉町一番地　瀧川三代太郎

發兌　日本橋區通四丁目四番地　金櫻堂

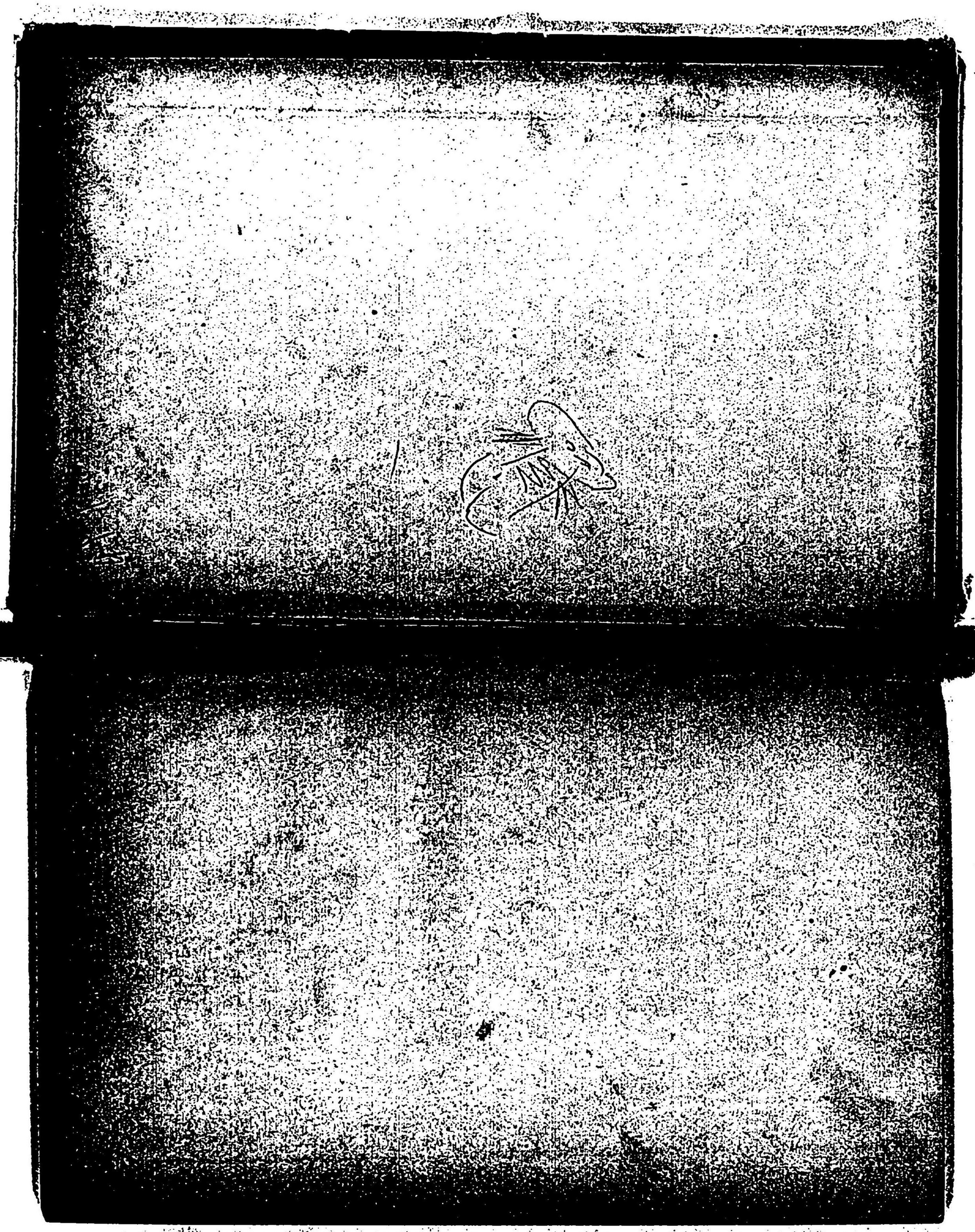


088194-000-1

特13-408

絵本太功記

近松　やなぎ／等著

M23

DBI-0017